烈祖成績

三

烈祖成績巻之三

元亀元年（一五七〇）至
天正三年（一五七五）

元亀元年庚午正月、浜松城修築功(功)竣す。隍(こう)（空堀）壁深固にして楼堞(ちょう)（土塀）壮麗なり。見る者以為(おも)へらく関東第一の壮観なりと。神祖、居を新城に移し、世子をして岡崎に君たらしむ。武田信玄、花沢城を攻む。小原資良、拒守竭(けつ)（尽）力すと雖へども衆寡敵せず、城遂に陥つ。資良、其子三浦右衛門と出で走る。小笠原与八郎氏儀　美作守氏興の子、後に弾正と称す。徳川記・松栄紀事並び長忠と作す。今小笠原家譜に拠り、之を訂す　其旧友なり。之に依り往かんと欲し、高天神城に至る。其罪を原(ゆる)すを請ひ、神祖の麾下に属す。氏儀以為へらく、神祖氏真と怨を構ふるは皆資良父子の所為なり。之を殺さば必ず神祖の歓心を得んと。乃ち資良父子を誘ひ之を殺し首を浜松に献ず。神祖、其の旧好を舎(す)てて濫(みだ)りに之を殺すを悪(にく)む。苟しくも迎合の計を為(な)すは

之賞めず。時の人亦皆之を悪む。年譜・創業記・家忠日記・徳川記・松栄紀事　今川氏真、其の下離叛するを以て再び駿府城を失ひ、又小田原に往き北条氏康に依る。氏康第を早川に営み之に居く。家忠日記・松栄紀事

二月、織田信長、朝倉左衛門督義景弾正左衛門孝景子を撃たんと欲し援兵を神祖に乞ふ。神祖、岐阜に往き信長に見ゆ。信長悦びて其の遠三二州を平定するを労り、援軍を出すを約す。神祖諾して岡崎に還る。松栄紀事

三月五日、信長兵を将ゐ岐阜を発す。

七日、神祖遠参二州の兵一万余騎を将ゐ岡崎を発し京師に父（之カ）（ゆ）く織田本信長記。

按ずるに、神祖居を浜松に移すは上文に見ゆ。然るに諸書皆岡崎と云ふ。今之に従ふ　信長神祖に先んじて江州に抵る。浅井下野守久政備前守亮政子、初称新三郎　其子備前守長政、信長の妹の夫なり。素信長と輯睦（仲よい）たり。故に兵血刃せず、直に越前に入る。

四月二十日、神祖、熊川を過ぎ若狭に至る。

二十五日、信長と敦賀に会ふ。信長、柴田勝家・木下秀吉・池田勝三郎信輝を以て将と為す。（信輝初名恒興、信長公乳母子、為家光。後事秀吉公。剃髪号勝入）神祖と兵を合はせ手筒山城を攻め之を抜く。首を斬ること一千三百七十余級なり。

二十六日、朝倉中務太輔定景拠る所の金崎城を攻む。定景信長を死地に陥さんと欲し、浅井長政と挟撃し之を殲（ほろぼ）さんとす。使僧伴（いつわ）り降を乞ひて曰はく「請ふ、郷導（案内）を為さん」と。信長之を信じ報（かえし）して（返事）曰はく「中務来降せば則ち吾越前を取ること甚だ易きのみ」と。乃（すなわ）ち丹羽五郎左衛門長秀（修理亮長政孫、将監長忠子）・明智十兵衛光秀をして兵を将ゐ（光秀後改惟任日向守）若狭に入り武藤上野介の任子を収めしむ。時に健歩有り、江州より来たり。報（しら）せて曰はく「浅井長政約に背（そむ）き義景と通謀す」と。信長犬（犬）いに駭（おどろ）き木下秀吉を以て殿（しんがり）と為（な）し定景の兵に備ふ。夜兵を引きて佐柿城に至り、朽木谷を経京師に還る。

二十八日、秀吉神祖の陳（陣 以下同様）に来たり之を告ぐ。神祖、秀吉と兵を引きて還る。諸将

亦信長の退兵を聞き、先を争ひて帰る。義景の兵及び越前若狭の土寇蝟集(いしゅう)し路に邀(ま)つ。神祖、親(みずか)ら鳥銃を放ち之を捍(ふせ)ぐ。内藤正成連射し六騎を斃す。渡邉守綱還り之を闘攘す。敵兵潰走す。北(にぐ)るを逐(お)い首を斬ること幾(ほとん)ど三百級。敵兵尾撃し、信長の陳、死者千余人なり。遂に秀吉を囲む。其の勢甚だ危ふし。神祖、金山（現福井県美浜辺カ）に至り之を顧みて曰はく「秀吉若し此に死なば則ち我何の顔有りて再び信長に見(まみ)えん」と。轡を回し卒を歩かしめ鳥銃を放つ。兵を厲(はげ)まし衆に先んじて進み、我軍悉く還る。血戦数合(すうごう)、敵兵大敗し、秀吉囲を脱し軍を全うして還る。神祖、兵を引き黒浜に至る。毛屋七左衛門兵を将ゐ之を邀(ま)つ。神祖、又兵を進め奮撃し之を破る。賊悉く須賀(菅)浜に逃走す。神祖、隊伍を整へ徐(おもむろ)に海石榴嶺(つばきみね)（椿峠辺カ）に登り兵を休むる時、秀吉、神祖に来謁して曰はく「今日の殿(しんがり)其の功全く公の援助に在り」と。之に深謝し去る。神祖、諸軍の擾乱を見、信長の兵と錯雑すれば則ち退軍必ず難からんと慮(おもんぱか)る。別に郷導を求め木野を経、其の夜松原に宿す。

二十九日、久久子気山（くぐしきやま）を経若州西津（にしづ）に至り小浜に及ぶ。従卒和田加兵衛は若州の人なり。故に先導を為（な）し向島連興寺に宿す。住持の僧徳元曰はく「聞くに、朽木信濃守、朝倉・六角に党し朽木谷を塞ぐ。土寇多羅尾四郎大夫・日詰浮泉等今津（琵琶湖西）に邀つ」と。前路の艱難を恐る。故に徳元をして先導を為さしむ。根来谷を経（根来越＝朽木麻生木地山）針畠（針畠越＝朽木小入谷）に及び、城州（山城国）鞍馬に出て京師に至る。黄金若干を徳元に賜ひ、以て還る。

諸書皆曰はく、神祖亦退き朽木谷に至り、長秀・光秀の帰路甚だ危きを聞き、兵を分け之を救ふ。両将、軍を全うして還る。長政の兵今津船木に充塞し頻りに鳥銃を放つ。神祖、隊伍を乱さず兵を整へて還る。秀吉、深く之を徳とす。按ずるに、神祖、金山に実戦し海石榴嶺に屯す。此の地今津船木に出づる路無し。又既に朽木谷に入りて何ぞ今津船木を過ぐるを得ん。其の誤明かなり。今一本徳川記抄に従ふ

信長懇ろに神祖の出軍の労を謝す。且（かつかつ）其の危を救はれ京師に進入し将軍源義昭に謁す。

五月、信長兵を江州に置き、諸将之を戍（まも）る。義昭に告げ岐阜に帰る。

十八日、神祖、岡崎に還る。信長、浅井久政父子を撃たんと欲し、援兵を神祖に乞ふ。（年譜・創業記・信長譜・家忠日記・松栄紀事）又木下秀吉をして長亭軒城主堀二郎の臣樋口三郎右衛門・多良右近に通謀せしむ。堀二郎を降すを以て義景の将、長久・刈安二城を守る者之（もの）を聞く。

六月八日夜、城を棄て越前に走る。江北路開く。（家忠日記曰、六月十九日信長攻長久・刈安二城抜之。非也。今拠浅井軍記）

十八日、信長大軍を帥ゐ江北に入り（年譜附尾曰、北長（ママ）兵三万五千。創業記曰、一万余。家忠日記不挙其数。但云、大軍。今従之）小田村に屯す。（浅井軍記）久政の臣大野木土佐・三田村左衛門・野村肥後・野村兵庫等横山城を守る。

十九日、信長横山城を巡視し水野信元・織田信包・丹羽長秀・堀二郎をして之に備へしむ。陳を今荘（姉川北岸）上野に移し、其兵を久政の管内に分け遣はし悉く邑里を焼く。是に先んじ、久政父子、援を朝倉義景に乞ふ。援兵未だ来らざる故に

挑戦せず。信長、兵八千を分け雲雀山（ひばりやま）（標高１４２．８ｍ）に屯し、余兵は小谷の東西に屯す。陳を虎御前山（とらごぜ）（標高２１８．６ｍ）に移す。然るに城兵未だ出でず。故に軍を挙げ小谷城下に逼（せま）る火を馬上小室瓜生縦（うりう）ちて矢島（八島やしまカ）野に屯す。長政、信長の兵を還すを期し以て之を撃たんと欲す。久政援兵の未だ到らざるを以て許さず。

二十二日、信長陳を竜鼻に退け将佐をして横山城を攻めしめ、以て長政の鋭気を挫（くじ）かんと欲す。城兵急を小谷に告ぐ。長政諸将と議す。義景の到るを待ちて戦はば則ち必ず勝を取らん。然るに横山城陥ちなば則ち士気沮喪（そそう）す。勝敗は天□（頂カ）に在り。一戦を決せんと。

二十五日、長政八千余兵を率ゐ大寄山（大依山）に陳す。

二十六日、朝倉義景、其族朝倉孫三郎景延をして兵一万五千を将ゐ之を援けしむ。長政と同じく大寄山に陳す。是日神祖、五千余騎を帥ゐ岡崎を発す。

二十七日、江北に至る。信長大いに悦ぶ。神祖、信長と議し、速やかに城を攻めんと欲す。城兵頻りに急を告ぐ。長政議して曰はく「敵陳猶ほ遠し。急ぎ進めば兵疲る。須らく今夜陳を野村・三田村に進めて明朝決戦すべきなり」と。浅井半助曰はく「信長能く軍機を察す。未だ陳を移すに易からず」と。遠藤喜左衛門曰はく「然らず。兵は疾速を貴ぶ。宜しく急ぎ進むべし。我間を伺ひ信長を刺さば則ち以て志を得べし」と。長政之に従ひ夜炬火を列ね軍装を為す。一本徳川記抄・浅井軍記　信長遥かに之を望み柴田勝家・佐久間信盛・木下秀吉等を召し令して曰はく「敵明旦来攻せんと欲す。須らく軍伍を定むべし。家□(康)、方面の将として浅井・朝倉両敵其一を択ばしめ以て之に当つべし」と。毛利新助をして神祖に謂はしめて曰はく「明日の戦に吾越前の兵を撃たん。卿近江の軍を撃て。然るに参河の兵多からず。須らく吾兵を以て之に益すべし」と。神祖、曰はく「吾援軍として此に来たり。水火を避けず。唯だ命は是れ従然後軍に在れと。甚だ思ふ所に非ず。

宜しく之を攻むべからず」と。秀吉固く請ひて曰はく「公、深慮有り。臣の知らざる所なり。今之を取らずんば、後必ず之を悔いん」と。信長終に許さず。秀吉喜ばずして去る。信長経世を釈し小谷に帰す。久政父子小谷を保ち得ること三年にして後亡ぶ。経世の力なり。一本徳川記抄・浅井軍記。按ずるに、浅井氏滅し経世京極高次に事ふ。剃髪し聞斎と号す凡そ斬首三千百七十級。神祖の功其の半に居る。諸書皆云三千余級、今従織田本信長記。按ずるに、創業記、参河の軍、獲首千五百余級と。今之に拠る。信長譜曰はく、首級三千余を京都に送ると。他書経見せず、故に此に附す信長大いに神祖の戦功を賞む。奇琛（珍しいたからもの）重器及び長光刀を贈り書を以て副へて曰はく「今日の大功、勝（あ）げて言ふべからず。前代比倫無し。後世誰か雄を争はん。当家綱紀（統治）武門の棟梁と謂ふべきなり」と。神祖、参河に凱旋す。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事○創業記・松栄紀事曰はく、信長贈る所の長光刀、旧（もと）三好下野守政勝の佩ぶる所の名刀にして将軍源義輝之を得、信長又之を得、神祖に贈る。長篠の役に神祖、奥平信昌の功を褒め之を賜る。所以攷に備ふ初め神祖、江州に赴くに参河の兵後れ至る者

有り。美濃・近江の間賊起ち路に邀(ま)つ。天野孫七郎重信力戦し之に死す。是に由り賊退き兵過ぐるを得。重信の父孫七郎賢景（孫四郎景延子）病に従軍する能はず。神祖凱旋するに及び、出でて駕を迎ふ。神祖、重信の功を称し之を褒め重信子久右衛門長子久蔵（時十六歳）其族の死者百余人。池田信輝之を継ぎ戦ひ創(きず)せられて退く。木下秀吉又之を継ぐ。長政勝に乗り急ぎ撃つ。秀吉亦敗走し、長政進み信長の麾下に逼る。神祖、其危きを見、馬上に槍を揮ひ衆を励まし以て之を救ふ。士気益振(ますます)ふ。大久保忠世・本多忠勝・酒井忠次・小笠原氏儀等先を争ひ力戦し撃つ。長政の陣大敗の後、拒ぐ。稲葉一鐵横から之を撃つ。長政の兵、戦ひ疲れ矢竭(尽く)く。見る越前の兵敗れ皆潰走す。敵兵遠藤喜右衛門、信長を狙撃す。竹中久作之を覚り喜右衛門を撃ち之を殺す。諸将勝ちに乗り北(にぐ)るを逐ひ小谷側に至る。信長其の険地に陥るを慮(おも)ひ、使を馳せ之を戒(いまし)む。諸将兵を引きて帰る。三河物語・徳川記・家忠日記・松栄紀事　信長竜鼻に陣し俘囚安養寺三郎左衛門経世を召す。問ひて曰はく「我軍始

め利を失ふと雖へども終に能く大捷す。此声勢に乗じ直に小谷城を攻むるは如何」と。経世其の破らるるを恐れ詭対して曰はく「長政悉く衆(あつ)むと雖へども父下野守を出し其の兵三千を下らず。今疲兵を以て新兵を攻めんと欲するは未だ其の可なるを見ざるなり」と。信長之を然りとす。木下秀吉急ぎ馬を馳せ来、信長に言ひて曰はく「請ふ、臣諸将を指揮せん。勝に乗り小谷城を攻むれば則ち立(たちどころ)に之を抜くべし」と。信長曰はく「吾所望(思ふ所カ)有り。請ふ、前軍と為(な)らん。儻(もし)兵を益さんと欲せば須らく稲葉伊豫守を以て援と為すべし」と。伊豫守義通薙髪(ていはつ)し一鐵と号す。備中守道則子、姓河野。中世分称稲葉氏。注于永禄三年。義通或作通朝。未知孰是 雅(もと)より勇名有り。信長一鐵に謂ひて曰はく「家□(康)能く子(し)の将略有るを知る。子の栄なり。援軍を為すを命ず」と。神祖、酒井忠次・水野忠重を以て前鋒と為す。松平甚太郎家忠 即東條亀千代、襲称甚太郎 ・松井忠次・小笠原氏儀・大須賀康高等二千余騎一軍と為り之に継ぐ。神祖中軍に在り。榊原康政・本多廣孝を以て左右翼と為(な)し稲葉一鐵後として拒ぐ。

都(すべて)六千余騎信長軍を分け十三隊と為す。阪井右近政尚を以て前鋒と為し池田信輝・木下秀吉之に継ぐ。丹羽長秀横山城に備ふ。

二十八日黎明、信長、候騎(物見の者)を遣はし之を偵す。長政の兵八千可(ばかり)東に陳す。景延の兵一万五千可(ばかり)西に陳す。織田本信長記曰、長政兵可五千、景延可八千、合一万五千。今従松栄紀事 信長使を馳せ神祖に謂ひて曰はく「昨夜既に軍議を定む。然れども吾深く憾ずる所は浅井父子なり。吾親(みずか)ら之を撃ち以て余憤を洩らさん。請ふ、卿、朝倉の兵を撃て」と。神祖、少なからず沮(なや)み之を諾す。酒井忠次進み曰はく「我軍既に長政の陳に向かふ。今之を易(か)ふれば則ち隊伍必ず乱れん」と。神祖曰はく「然らず。朝倉の兵多く浅井の兵少し。少を以て多に易ふること、武夫(もののふ)の欲する所なり」と。急ぎ軍列を整へ西に向かふ。酒井忠次・水野忠重・松平甚太郎家忠・松平伊忠・松井忠次・小笠原氏儀及び東参河の兵隊を列ねて進む。景延・長政姉川を隔てて野村三田村に陣す。前鋒既に交づ。景延の兵百騎可(ばかり)隊を離れて出で将に横断せん

とす。我軍本多忠勝其の機を見、之を先撃せんと請ふ。神祖、之を然りとす。忠勝急ぎ馳せ電撃す。大久保忠鄰・安藤彦四郎直次（木工助基能子、更彦兵衛、称帯刀）相継ぎて進み力戦し之を破る。敵退走し朝倉景延の麾衆来、前（すす）む。其の鋒甚だ鋭く、我兵微（わず）かに退き姉川に至る。中央石川数正還り戦ふ。犬塚甚三郎敵の槍を擥得（とりえ）相争ふこと数次。遂に槍を奪ひ之を殺す。（松栄紀事曰、神祖、褒其功更称又内、言又無其此也、無内国音相通）内藤甚一郎正貞（四郎左衛門正成子）己の槍を敵陳に遺し落とす。馬を回し槍を取りて帰る。衆其の勢に乗り鼓譟（こそう）して進む。本多忠勝衆に挺（ぬ）きんでて戦ふ。松井忠次敵の射る所と為る。矢左手を貫き鞍に徹る。忠次其の矢を抜き敵を射之を殪す。松平甚太郎家忠年甫十六、陳を犯し力戦す。敵の魁帥（かしら）魚住龍門寺等八千余騎幾（ほとん）ど麾下に逼る。近臣大久保新八郎康忠（五郎右衛門忠勝子、後襲称五郎右衛門）・小栗荘二郎忠政（後更称又一、時十六歳）・鷹見新八郎（十六歳）・大久保忠豊・其弟与一郎忠益（更称助左衛門）・服部一郎右衛門保英（十六歳）接戦し首級を獲る。芝山彦十郎・小川三十郎戦死す。

大久保権十郎忠直　十八歳、攷大久保系図忠俊第五子甚左衛門名忠直。然不見其初称権十郎、後更荒之助、未詳　敵の槍を奪ひ甲士一人を刺し其の首を獲る。本多正信敵と闘ひ幾ど危ふし。按ずるに、正信一向一揆に党（くみ）し亡げ去る。上文七年に在り。其の後赦され召し還さる。年月考ふる所無し　秋元甚兵衛吉久敵を射之を救ふ。大久保忠佐馳突励戦す。其の姪忠鄰・安藤直次皆首級を獲る。敵猶ほ竟（競カ）進す。勝敗未だ決せず。神祖、槍を杖き戦を指揮し、血槍柄を疇（けが）す。榊原康政・本多廣孝をして横から敵の陳を衝（つ）かしむ。康政左右を顧みるに、前に水田有り。底皆沙石にして水甚だしくは深からず。馬を直前に馳す。廣孝先を争ひて進む。康政奮戦し創せらる。廣高（孝）の子康重敵を斬り首級を獲り亦創せらる。渡邉守綱・本多正重・水野太郎作等槍を揮ひ突戦す。阿倍忠政連射す。越前兵多しと雖へども我兵前後に挟撃し敵支ふ能（あた）はず。遂に潰走す。勝ちに乗り追撃し虎御前山に至る。勇士一言集曰、小笠原与八郎之兵渡辺金大夫、以塗朱雨傘、為背旗、与孫三郎之兵接槍。□（堤カ）上信長公望見、召金大夫大称賞之。其余中山是非之助・林平六等五人皆先金大夫接槍。然在堤下

信長公所不見。故金大夫為最山地高旱。遂致如此　敵将真柄十郎左衛門の膂力（りょりょく）人に邁（す）ぎ五尺の大刀を揮ふ。其の二子を率ゐ来戦す。向阪式部槍を揮ひ之と接す。十郎左衛門其の首鎧を撃ち砕き之を斃す。弟五郎二郎奮闘し十郎左衛門の腰之を斬る。式部の族六郎五郎吉政急ぎ進み槍を以て十郎左衛門を椿（つ）き之を殺し其の首を獲る。青木所左衛門一重　加賀右衛門重直子、後称民部少輔、事秀吉公、為大阪七隊之一長。詳于慶長十九年　其の長子十郎を斬る。弟亦殺さる。高力清長、敵将前場新九郎を斬る。前場或作前波　其の余の敵将前場新八郎新九郎兄・小林瑞周軒・魚住龍門寺・黒阪備中等皆首を授く。戦方に酣（たけなわ）、敵兵二人神祖を狙撃す。神祖刀を扣（ひか）へ加藤喜左衛門・天野康景、二人を撃ち殺す。血神祖の刀に濺（そそ）ぐ。

是の日鏖（おう）戦する（力をつくして戦う）は松平信一・忠正・真乗・内藤信成・正成・菅沼定政・大久保三郎右衛門忠正　弥三郎忠正、更称三郎右衛門、族属見永禄七年　・加藤正次・都筑總左衛門秀綱・天野彦右衛門忠次・成瀬正義・其弟一斎・榊原忠政・横地造酒佐

正家・森川氏俊・青山虎之助長利（按ずるに、永禄七年虎之助一向一揆の乱に死す、蓋し其の子なり）野々山元政・山本忠兵衛正義・杉浦弥一郎親次・阪部又十郎正家・丹羽四郎左衛門・松下宗左衛門・大河内善兵衛・飯島才蔵及び本多忠勝の兵三浦竹蔵・櫻井荘之助勝次・原田弥之助・木村三七・渡邊半兵衛・菅沼定盈の臣今泉延傳等なり。（松栄紀事曰、定盈罹疾、不能軍、故以延傳為使、属酒井忠次）力戦し皆首級を獲る。大田吉勝五たび敵と闘ひ首五を獲る。渥美友勝（松栄紀事作友元、下文三年、作友吉、而天文十八年、永禄六年並作友勝、今拠之定為友勝）麾（き）（指揮旗）を秉（と）る敵と搏（博）（くみう）ち其の首を獲る。小笠原康元（松栄紀事作新九郎長元今計（訂）之）・喜三郎貞慶（信濃守長時第三子、後称右近太夫）・左衛門重廣・彦七郎貞頼兵三千を将ゐ敵と戦ひ功有り。信長の前鋒阪井政尚の兵二千騎子（于カ）姉川の上（ほとり）に陣す。長政の魁帥（かいすい）磯野丹波秀昌、高宮参川・大宇大和・山崎源太左衛門・赤田信濃等兵八千余騎を率ゐ水を渡りて進む。其勢甚だ猛なり。政尚戦ひ敗る。政尚及信濃守、神祖に属す。「伊賀守三照及新九郎、信玄に降る。小大膳定利段嶺を出て流

寓す。定利大膳某子、按ずるに、松栄紀事天正十二年定利正家と作す。関原合戦誌定利と作す。菅沼系図と合ふ。蓋し後に名を改むるなり。又按ずるに、松栄紀事新九郎無し。今本書天正元年文に拠り之を補ふ 竟に定盈、麾下に仕ふるに依り、足助邑の民、敵と通報し将に岡崎を攻めんとす。神祖、青山喜太夫忠門 青山三郎定俊之裔、父名闕、松栄紀事作義門、今拠寛永系図諸伝略、訂之 ・阿知和右衛門をして部下の兵を率ゐ百百村に屯し岡崎を扼へしむ。道路の樹柵に斥候を置き、多く屯火を設け守衛厳しく備ふ。賊発つ能はずして逃散す。

四月、遠州の賊起ち将に作手口より岡崎に入らんとす。

七日夜、岩津を侵掠し火を縦ち邑里を焼く。神祖、青山忠門・其弟牛大夫・卯野小兵衛・阿知和右衛門等をして岩津に趣かせ戦に与らしむ。之に敗れ賊真福寺に遁る。北るを逐ひ之を撃つ。忠門戦死す。賊又逃げ東参河吉田口に至り潰散す（散り散りになる）。松栄紀事・諸士伝略

是の月、信玄伊奈を出て足助城を攻む。守将鈴木喜三郎城を棄て走る。家忠日記・甲

陽軍鑑

五月、信玄進み吉田二連木に至る。神祖、兵を将ゐ之を拒ぐ。互に勝負有り。松栄紀事曰、戦於一宮、今従甲陽軍鑑　小林傳四郎吉勝敵と神祖の馬前に相搏(搏)ち敵兵敗る　甲陽軍鑑・松栄紀事」

二年辛未正月五日、神祖従五位上に叙せらる。

十一日侍従と為る。年譜・創業記・公卿補任・家忠日記・松栄紀事

二月、武田信玄師を帥ゐ駿州田中城に至る。遠州小山を按行し（調べてまわる）能満寺城を築く。三月、信玄高天神城を攻む。城主小笠原氏儀力戦し之を拒ぐ。其族貞頼・重廣援に入る。信玄其の抜き難きを知り兵を引きて去る。乾・掛川・久能諸城を按行し信州伊奈に屯す。家忠日記・甲陽軍鑑・松栄紀事　是の春、秋山晴近東参河を略し、段嶺城主菅沼刑部の臣城所道壽・作手城主奥平貞能の臣山嵜善七郎を誘ひ、刑部・貞能をして信玄に属さしむ。晴近設楽郡に陣し菅沼定盈・設楽貞通・西郷

清員等之を攻む。晴近引き去り天野景貫兵を出し長篠城を攻む。々(城)兵之を拒ぐ。景貫の子小四郎景厚衆に先んじ水を渡りて進み城兵と槍を接す。士卒互に死傷多し。菅沼道満戦死す。晴近長篠城を囲む。道壽又長篠城主菅沼正員の臣菅沼伊豆満直に勧め正員を信玄に降らしめんと説く。晴近、道壽を野田に遣(遣カ)し菅沼定盈を信玄に属せしめんと説く。定盈之を却(しりぞ)く。刑部の族、其腕を砍(き)り之を断つ。松栄紀事

既にして信玄兵を引き甲府に帰る。甲陽軍鑑

七月、浜名郷主叛き信玄に降り浜名を棄てて去る。神祖、浜名郷を戸田忠次・本多信俊に分け給ふ 家忠日記・松栄紀事、按ずるに、永禄十二年浜名城降る。本多忠勝・酒井忠次をして之を守らしむ。二書主名を載せず。未だ誰たるかを知らず。蓋し浜名は肥前守頼廣の党なり

是の月、織田信長使を浜松に遣はし神祖に謂ひて曰はく「浜松城は信玄の所領州郡に接近す。宜しく岡崎に徙居(しきょ)(転宅)すべし」と。神祖之を謝して曰はく「徙居未だ晩からざるなり」と。使者出て神祖笑ひ近臣に謂ひて曰はく「信長何の所見に

て所言此の如きや。吾若し浜松を去らば則ち当(まさ)に刀剣を蹋(ふ)み折りて復(ふたた)びは用ゐるべからざるべし。信玄の武力豈に畏るるに足らんや」と。甲陽軍鑑・松栄紀事

三年壬申、初め武田信玄、神祖と約す。大井川を以て界と為し、遠州は神祖に属し、駿州は信玄に属すと。閏正月十三日、神祖兵を帥ゐ大井川に至り疆域を按行す。酒井忠次・小笠原氏儀伊呂瀬を渡り島田川の上(ほとり)に陣す。十九日、神祖浜松に帰る。信玄使を遣はし誣(いつわ)りて曰はく「曩(さき)（以前に）に天竜川を以て界と為し東西を分け領したり。今兵を大井川に出し何為(なんすれ)ぞ我が疆場を侵すや」と。信玄生事(せいじ)（事をおこす）以て兵端（戦はじめのきっかけ）と為さんと欲す。

神祖其の詐謀(さぼう)に怒り益(ますます)之と絶つ。家忠日記・松栄紀事・年譜附尾

十月、信玄騎兵三万五千を将ゐ遠州に趣き、山縣昌景をして五千騎を率ゐ東参河に出でしめ遠州に会ふ。天野景貫を以て郷導と為し多多良・飯田二城を攻め之を陥す。進み久野を攻む。久能宗能堅く守る。甲軍袋井・見付間に陣す。神祖、之

を聞き大久保忠世・本多忠勝・内藤信成等をして兵四千を将ゐ之に赴かしむ。内藤信成家忠日記作内藤四郎左衛門正成、今従年譜・甲陽軍鑑・一本徳川記抄 三将見付駅を過ぎ三加野に陣す。本原西烏辺敵の形勢を覘ふ。信玄之を望み其の兵を指麾し袋井より林下に進む。其勢敵し難し。内藤信成儕輩（同輩）に謂ひて曰はく「敵大兵なり。浜松八千の兵半ば此に在り。我兵甚だ寡し。今日の戦志を得べからず。若し交鋒し利を失はば則ち再びは戦ひ難し。鄣に援兵を信長に乞ひ之を待ちて戦ふが可なり。退軍するに如かず。然れども其の相去ること甚だ近し。我退かば則ち敵必ずや之に乗ぜん」と。言未だ畢らざるに、甲軍兵を分け我後を絶たんと欲す。勢甚だ危し。本多忠勝進みて曰はく「我試みに之を謀るを為さん」と。乃ち従兵大兼彦八郎をして歩卒数十を帥ゐ見付駅に至らしむ。民屋の所有する薪蒭戸扉茅席の類を取り一言阪の路頭に丘陵の如く積む。烏銃を竹林に翳し甲軍の到るを待ち火を縱ち烏銃を放つ。忠勝単騎槍を提げ士卒を指麾し馬を七八次馳す。勢甚だ猛励なり。敵敢

へて近づかず。烈焔(えん)敵兵の来る路に邀(ま)つ。其の煙塵に乗じ退兵すること三町余。敵急ぎ起(た)ち之を追ふ。大久保忠世・其弟忠佐・其族忠正・忠直・本多正重・都筑藤一郎及忠勝の兵櫻井勝次・三浦竹藏・大原作野右衛門・大原物右衛門・柴田五郎右衛門・村越与三左衛門等力戦し之を拒ぐ。敵の鋒稍挫(ややくじ)く。忠勝軍を全うして退く。諸書皆曰、神祖率兵三千余騎向一言阪拒之。忠勝縦火于見付駅舎。甲軍猶豫移時、忠勝信成以軍之利害白神祖。神祖然之。使忠勝退軍。忠勝指麾士卒退軍。敵急追也。其部兵拒之。全師而還。松栄紀事曰、令信成偵敵形勢。神祖慮信成若遇大兵被囲則不能脱去。使忠勝率精騎救之。至一言阪敵急逼之。忠勝及従騎大久保忠佐・其族勘七郎忠正・荒之助忠直・都筑藤一郎・渡邊平六眞綱・其族半蔵守綱・半十郎政綱等揮槍力戦。我兵入見付駅敵即圍之。忠勝縦火駅舎乗煙塵退兵。按ずるに、一説に忠勝の所為神祖退軍の時たりと。一説に信成一人退く時たりて火を見付駅舎に縦つ者なりと。二説略（ほぼ）同じ。皆事実を失ふ。今一本徳川記抄に従（よ）る 神祖真古目に陣す。或作馬篭国語相同 成瀬吉右衛門正一を遣はし 藤左衛門正頼第二子藤蔵正義弟 忠勝を褒めて曰はく「汝の驍勇非ずは則ち我が兵幾(ほとん)ど免れず。絶倫逸群と謂ふべし」と。甲州の将

士亦忠勝の勇略を称む（ほ）年譜・創業記・家忠日記・甲陽軍鑑・松栄紀事。一本徳川記抄不載。神祖、陣於真古目而云、神祖在浜松城聞之。未知孰是 信玄見付より軍を江台島に移す。其子四郎勝頼・姪（おい）左馬助信豊 信玄弟左馬助信繁子 及穴山梅雪 武田伊豆守信友子、名信君、歴左衛門尉陸奥守、剃髪号梅雪、不白信玄女婿 をして二股城を攻めしむ。馬場美濃氏勝 松栄紀事作信房、今従播州斑鳩寺過去帳 小田原の援兵及び信玄の麾下兵合はせ四千余騎を率ゐ、以て浜松の援軍に備ふ。二股の守将中根平左衛門正照・松平善兵衛康安 善兵衛正親子、称石見守 ・青木又四郎吉継等堅く守り拒戦す。神祖、兵を将ゐ之を救ふ。天竜川を渡りて陣す。甲軍の部伍厳整にして戦ふに軽んずべからず。故に兵を収めて還る。信豊・梅雪相与（とも）に謀りて曰はく「城守完固なり。急ぎ攻むれば則ち吾士卒を損なふ。此の城の東は小流に帯し西は天竜に臨む。轆轤を以て河水を取り今其の汲む道を絶たば則ち血刃せずして抜くべし」と。乃ち筏を結び綍（おおづな）を繋ぎ、材木上流より之を放ち水路を壅（よう）遏（あつ）（ふさぎ遮る）す。甲陽軍鑑・松栄紀事 夜に入り敵兵数百城に近づき鳥銃を列（つら）ぬ。松平康

安巨石に蔽(かく)れ之を覘(のぞ)く。少焉(しばらく)して敵鳥銃を連ね放つ。城兵皆駭く。独り康安のみ去らず。大草松平系図　城兵の水大いに困り、正照降帰を浜松に乞ふ。松栄紀事○本書載一説曰、神祖聞二股之急出兵救之。城兵不知救至。致城而去。故不戦而帰　勝頼既に二股城を得、依田下野をして之に拠らしむ。東参河の諸将其の兵威を畏る。是に先んじ山家三方の将既に信玄に降る。松栄紀事○本書曰、作手奥平氏・長篠・段嶺管沼氏皆叛降信玄。按ずるに、二年春奥平貞能・菅沼刑部・菅沼正員既に信玄に降る。此に至り始めて叛するに非ざるなり。故に是に先んずと書く　唯だ菅沼忠久・菅沼定盈のみ野田城を守り其志を渝(か)へず。山縣昌景・秋山晴近信州より参州に趣き遠州井平に陣す。宇津山砦最も要地たり。甲軍営を連ね以て浜松の援兵を絶つ。神祖、勇将を択び之を守らんと欲す。諸将敢へて応ずる者無し。松平清善致仕し家に在り。独り奮ひて往き之を守らんと請ふ。神祖、其の忠勇に感じ一千貫の采地を賜ふ。家忠日記・松栄紀事　浜松の諸将神祖に援兵を織田信長に借らんと勧む。神祖之を欲せず。諸将諫めて曰はく「信長領数州の地、兵数万有りて累(かさね)て援軍を

我が主に乞ふ。公僅か参遠二州を領す。三四年来信玄と争戦すと雖へども未だ嘗て援を信長に乞はず。今之を借ること何ぞ可ならざること有らん」と。神祖之に従ひ使を岐阜に遣はし之を告ぐ。三方原合戦記　信長、佐久間信盛・竜川一益・平手甚左衛門汎秀等をして来援せしむ。織田本信長記・家忠日記・松栄紀事。按ずるに、徳川歴代・年譜附尾、甚左衛門、監物と作す。信長記に拠れば監物は甚左衛門の兄なり。今上三書に従ふ○一本徳川記抄曰はく「尾州の援兵佐久間右衛門尉・平手甚左衛門二千余兵進み荒井より先に戦場に到る。滝川左近将監・武藤弥平兵衛・氏家左京亮・稲葉伊豫守・伊賀（ママ）伊賀守四千余兵、本阪を経未だ闘ふに到らず。我兵戦ひ敗れて帰る。之に拠れば則ち援軍路を異にして至る。前後纔かに差あること一二日。三将の牽袲之諫（けんしゅうのかん＝袖を引いて諫める）有るを得ず。十一月三字或廿一日訛。亦未だ知るべからず。然るに諸書の説皆是の如し。未だ孰れ是なるか知らず。附し以て考に備ふ

十一月、援軍浜松に至る。信長の使神祖に謂ひて曰はく「縦ひ信玄戦を欲するも慎みて出兵する勿れ」と。是に由り両軍相持ち月を踰え戦はず。信玄既に遠州数

城を陥とす。威、遠近に震ふ。関西の将士帰心する者多し。故に信玄遠州より参州へ出て濃州を歴京畿に耀兵（武威をしめす）せんと欲す。

十二月、信玄、兵四万余騎を率ゐ（拠年譜・家忠日記）陣を三方原に移す。（三方原或作味方原。梅花無尽蔵作箕方原。聞之遠州人、駿遠参三州芻牧（牛馬を飼うこと）之地故云三方原。今従之）大（火カ）を浜松城外邑里に縦ち井伊谷より長篠に出でて大田邑を過ぎんと欲す。神祖之を聞き怒りて曰はく「信玄軍を引き我城外を過ぐ。是れ我を蔑むなり。出で之を撃つべし」と。尾州の三将（拠一本徳川記抄、則滝川一益未到、当書二将、然一本徳川記抄無諫神祖事。今従上諸書）褻を率き諫めて曰はく「信長固く臣等を戒む。信玄は老将なり。且は大軍を率ゐる。公、戦はんと欲せば必ず当に之を止むべしと。請ふ信長の為に怒を抑へよ」と。神祖曰はく「往年信玄兵を耀やかす。小田原城門に薄るに北條氏政敢へて戦に出でず。世を挙げ其弱きを笑ふ。今敵我郊野を踏□（ふみにじる・□＝足扁に藉）して一矢も放たずは丈夫に非ざるなり。卿等強て諫むれば則ち吾山林に抖擻（世を捨てる）して軍

事を信康に付けん」と。辞気激烈なり。然るに三将固く諫めて止まず。神祖、已むを得ず悒鬱たり。

弥日（久しくして）二十二日、信玄兵を引き将に井伊谷に入らんとす。勝頼及び馬場氏勝・山縣昌景殿を為す。神祖及び尾州の援兵亦出でて三方原に陣す。氏勝・昌景、信玄に謂ひて曰はく「浜松の兵我を躡ひ競ひ出づるは是れ我計中に堕つるなり。速やかに旆を反して戦ふべし」と。小山田左兵衛信茂の兵上原能登、信茂に告げて曰はく 三方原合戦記信茂作高重、今従甲陽軍鑑「浜松の兵布陣甚だ薄し。尾州の援兵旌旗動揺し敗走の色有り。戦必ず勝つ」と。信茂馳せ信玄に告ぐ。信玄室賀一葉軒をして往かしめ之を偵ふ。諸書室賀作諸賀。按ずるに、年譜附尾、長篠の戦に室賀山城守行俊入道一葉軒有り。松栄紀事亦室賀入道と作す。諸室国音相近し。蓋し一人なり 亦能登の言の如し。信玄軍を回し信茂前鋒を為す。我兵八千余騎分かれ九隊と為る。酒井忠次・石川数正・柴田康忠・青木吉継・中根正照進み前隊と為る。小笠原氏儀・松平甚太郎家忠・松井忠次・

本多忠勝之に継ぐ。榊原康政麾下たり。前鋒尾州の援軍の将滝川一益、柴田康忠・大久保忠世と隊を合はす。信盛・汎秀相並びて陣す。鳥居四郎左衛門軍監たり。日晡を加へ（日暮れ時を過ぎ）四郎左衛門神祖に白して曰はく「敵鋒精彊にして布陣甚だ堅し。戦必ず利ならず。請ふ兵を戢めよ」と。神祖怒り聴かず。渡邉守綱、康忠・忠世に謂ひて曰はく「敵衆く我寡し。宜しく険に拠り以て待つべし」と。神祖、之を聞きて曰はく「譬ふるに人我閨中に入り枕を蹴ること有らば誰か敢へて臥して之を較せざらんや。（誰が一体横になったまま対決しないものか、皆戦うはずだ）勝敗天頂に在り。一戦を決せん」と。諸将皆死を夬（＝決）して敢へて復びは言はず。大久保忠佐・柴田康忠歩卒を帥ゐ石川数正の陣前に進み鳥銃を放つ。信玄歩卒二三百をして丘阜に登り礫を摘り尾州の援軍に擲げしむ。中たること雨の如く以て其の怒りを挑ふ。平手汎秀果たして怒りて曰はく「是我を以て嬰児と為すや」と。急ぎ起ちて進む。甲軍之を囲み撃つ。汎秀敗走す。数正の兵声を発して進み其の部兵外山小作正重

槍を揮ひ第一たり。小山田信茂の兵と戦ふ。渡邉守綱旁(かたわら)に従ひ出で長槍を以て敵を刺し之を殺す。戦急にして斬馘(ざんかく)に遑(いとま)あらず。信茂敗走す。北(に)ぐるを逐(お)ひ斬首すること二百級。馬場氏勝信茂に代はりて進む。忠世・忠勝・康政進み□(闘カ)ふ。忠勝の兵荒川甚太郎・本多甚六・河合又左(五)郎・多門越中戦死す。櫻井勝次敵を斬り首級を獲る。氏勝の兵亦敗走す。神祖、麾下の兵を以て山縣昌景を撃つ。昌景敗走すること数百歩。酒井忠次・大須賀康高・小笠原氏儀、山家三方の兵と戦ひ大いに之を敗る。敵兵七隊の将悉く敗れ我が兵勝に乗り追撃す。武田勝頼奇兵（不意打ちの兵）を以て横から麾下の兵を撃つ。昌景亦還り闘ふ。信玄米倉丹後をして輜重(しちょう)（軍の荷物）を棄てしめ横から我軍を撃つ。武田信豊・穴山梅雪相継ぎ我軍の後に邀(ま)ち之を急攻す。信玄鼓を鳴らし徐(おもむろ)に進む。其の勢山嶽の如し。我軍悉く敗績(積)す（戦にひどく負ける）。松平甚太郎家忠独り留まり拒戦す。従兵の戦死するもの数十人。数正目を嗔(いか)らせ士卒を励ます。下馬し槍を横にし敵の至るを待つ。甲軍勢に乗り競進し

相去ること数歩。数正の兵齊起奮撃す。敵又敗走す。神祖、戦の危きを見切歯(せっし)す。衆を励まし口正に沫出(あわ)づ。還り撃つこと三四たび。我軍戦ひ疲れ、加藤比祢之丞及弟源四郎・九郎二郎正信・大久保新蔵（平右衛門忠員第四子、忠世弟）・河合八度兵衛（松栄紀事作弥藤兵衛。按ずるに、河合八兵衛某敵と接すること一日に八度。神祖其の勇を賞め名を八度兵衛と更（か）ふ。三方原に戦死す。子孫水戸威公に事ふ。八度訛り弥藤と作す。故に今之を訂す）・杉原須藤兵衛・米津小大夫政信・榊原摂津守忠直・石川半三郎正俊・松山久内・松平弥右衛門・江原又助・中根彦三・川澄源五郎・天野麦右衛門等三百余人戦死す。（戦死三百余人拠家忠日記・年譜附尾）中根正照・青木吉継二股城の失を恥ぢ親族僮僕と守り悉く陳を冒して死(こ)す。鳥居四郎左衛門、成瀬正義と勇を賈し忿争す。戦酣(たけなわ)にして各首級を獲る。互いに相徴(あらわ)し苦戦して死す。正義、弟正一に謂ひて曰はく「汝能く地形を諳(そらん)ず。速やかに我君を浜松に入れ奉るべし。我此に死す」と。言畢り敵に赴きて死す。高力清長其の子権左衛門正長と（後為土佐守）力戦し創せらる。其の族岩堀勘解由左衛門父子

戦死す。佐久間信盛戦はずして走(に)げ、平手汎秀直ちに敵陣を犯して死す。汎秀の父政秀天文中織田信長を諫めて自殺す。人皆其の家声を墜さざるを称(たた)ふるなり。年譜・創業記・甲陽軍鑑・家忠日記・松栄紀事。政秀初名清秀、故諸書多書清秀。按ずるに、南行雑録、尾州愛知郡政秀寺、信長公剏建（創建）し以て其の冥福を薦む。今之に拠る。○一本徳川記称曰、山口飛騨・長谷川橋助・佐脇藤八等尾州の援兵戦死するもの百十余人。滝川左近・武藤弥平兵衛等進み木阪より未だ戦場に到らざるに我軍の敗るゝを聞きて還る。上文に見ゆ。注附し以て考に備ふ　神祖、其の利ならざるを知り兵を引きて還る。本多忠眞後として拒ぐ。敵急ぎ追撃し忠眞力戦し之に死す。内藤信成殿(しんがり)を為(な)し部兵数十人戦死す。甲軍蝟集し我に逼る。神祖失意し必死なり。将に進み闘はんとす。大久保忠鄰・菅沼定政・松平景忠・三宅弥次兵衛正貞（總右衛門康貞弟）・小栗忠蔵久次（後更称忠左衛門）内藤正成・鵜殿八郎二郎・平岩虎之助・渡邊守綱・服部正總等、或は騎(の)り或は歩きて之を擁護す。夏目吉信神祖の馬を扣(ひか)へ諫めて曰はく「勝敗は兵家の常なり。此れ大将の韻命（命をおとす）の時に非ず。宜しく速やかに城に帰り以

て後挙を図るべし」と。馬を策（むち）うち走らしむ。諸士伝略・雑録畔柳助九郎事記並曰、吉信以槍鐓（たい＝いしづき）突。馬駿足善走　畔柳助九郎武重、神祖の左右を離れず。吉信之に謂ひて曰はく「我留まりて戦死せん。子善（しよろ）しく我君を護り城に入れ」と。武重同じくは一つに死なんと請ふ。吉信固く之に強ひる。武重扈従して去る。吉信槍を揮ひ敵二人を殺し従士二十余人と与（とも）に皆戦死す。初め浄土真宗の乱に松平伊忠、吉信の命を請ひ神祖之を釈（ゆる）す。是（ここ）に至り吉信恩に感じ節に死す。人皆神祖の寛仁に服して伊忠の能く人を知る（人の価値を知る）を称（たた）ふるなり。家忠日記・徳川記・松栄紀事　大久保忠鄰の馬斃れ窘歩（きんぽ）（苦しみながら歩く）す。小栗久次股を傷し敵の馬を獲りて之に乗る。神祖、久次に命じ馬を偖（借）し以て忠鄰を救ふ。久次馬を忠鄰に授け徒歩にて水野左近正重に従ひ後騎を為（な）す。敵進めば則ち正重留り之を拒ぐ。正重危ければ則ち神祖轡を回し之を救ふ。成瀬正一・日下部兵右衛門定好・島田次兵衛利政稍稍（しょうしょう）（すこしずつ）来集る。敵七騎急ぎ逼る。正一一騎を撃ち殺す。神祖兵を操り反撃す。敵披（ひ）

靡（びおそれ伏す）して去る。家忠日記・松栄紀事○成瀬系図曰はく、甲陽七騎神祖に逼る。成瀬正一先に進む者を撃ち馬より墜す。馬亦傷つき奔る。六騎の者馬を下り傷せらるる者を扶け起こす。其の間に神祖浜松城に馳せ入る。即ち此時の事なり　甲軍の一人弓を執り神祖を狙ふ。内藤正成之を誰何す（すいかとがめる）。天野康景敵の首を提げ来、之を馬上に見其の弓を蹴落とす。敵亡げ去る。三方原合戦記　松平康安時に年十八。苦戦し数創（あまた）せらる。二箭其の冑（甲・帽）に中（あた）る。自ら一箭を抜くも未だ一箭を抜くに及ばず。敵急ぎ之を追ふ。康安窘（くる）しむこと甚だし。従者馬を牽（ひ）き来たり。康安喜びて之に来（乗）る。岡崎の町奉行右衛門七　本書失姓氏　膝を傷し歩く能はず。康安を呼び馬を借せしむ。康安已むを得ず馬を下り右衛門七をして騎（の）せしめて退く。大草松平系図　甲軍某　称長。諸書失姓氏　直に前（すす）み神祖に逼る。神祖之を叱す。野中三五郎重政之を撃ち殺す。松栄紀事・野中氏家譜○按ずるに、長く神祖の近習の士たり。故有り、浜松を去りて信玄に事ふ。故に神祖知りて之を叱す。紀事・家譜並びに云ふ、「神祖浜松城に入り盃酒及び信国の短刀を賜ひ以て重政の功を賞む」と。重政の子孫水戸義公に事ふ。賜ふ所の短刀今曽孫三五郎重羽家に伝へ在り　浜松城中

軍の敗るるを聞き沸騰す。高木廣正敵の髡首（こんしゅ）（ぼうず頭）を獲る。神祖、廣正をして首を刀鋒に貫かしめて狗（みせし）めて曰はく「甲軍戦ひ敗れ吾信玄の首を獲たり」と。衆伝へ聞き乃ち定む。神祖、大久保忠世を召し旌旗を賜ひ之を犀磯（磯カ）に建てしめ以て敗兵を集む。敵、大将此に在りと意（おも）ひ競ひ之に赴く。神祖、遂に浜松城に入るを得。城門闔（と）づ。畔柳武重大いに呼ばはり開門せしむ。神祖、騎りて城に入る。武重の労を賞め腰間の扇を取り之を賜ふ。松栄紀事・助九郎事記並び云ふ、時に雨に遇ひ紙破れ唯だ骨子のみ存し今に至り家に伝ふと 馬を下り槍を杖にし慨然として曰はく「鄙（さき）に信玄将に井伊谷に入らんとす。尾ひて之を撃たば則ち豈に勝を取らざらんや。遺憾勝げて言ふべけんや（言葉にならないほどくやしい）」と。衆神祖の勇壮に服す。松栄紀事本書曰はく「神祖嘆じて曰はく、佐久間・滝川の阻む所と為り。志を得る能はず」と。一本徳川記抄に拠れば門（ママ）「佐久間・滝川之を諫止する事無し」と。上文に注す。附し以て考に備ふ 都筑秀綱の妻豫め粥を煮以て士卒に餉（おく）る。神祖悦び衣服を賜ひ之を賞む。既にして敵兵麕（むら）がり（群れ集まる）至り城に薄る。滝川

一益塩谷口を守り（一本徳川記抄一益未だ到らず、塩谷口を守る無しと。説上に見ゆ）戸田忠次山手口を守り渡邊守綱弟政綱と大谷口より葦田に至り将に入城せんとす。敵兵前後を充塞す。渡邊半平真綱・天野又作・佐橋乱之助（按ずるに、佐橋・佐馳国音相近し。疑ふらくは一氏なるかと）・勝谷甚五兵衛・櫻井勝次相踵して至り七人健闘し敵を却く（しりぞ）（松栄紀事・年譜附尾・諸士伝略）神祖、天野康景・植村正勝をして城門を警衛せしむ。鳥居元忠玄黙口（げんもく）（＝玄目。浜松市馬込川右岸）を守る。元忠将に扉を闔ぢん（と）とす。神祖命じ之を開けしめて曰はく「闔ぢなば則ち敵我を以て怯と為さん。其の弊に乗り易し。開けば則ち敵をして測らざらしむ」と。且（かつがつ）城兵の後に至る者を納む。馬場氏勝・山縣昌景来攻す。元忠開門し力戦す。股を傷せられ猶ほ闘ふ。（松栄紀事・徳川歴代）渡邊守綱敵を両次却く。渡邊政綱・櫻井勝次各首級を獲る。夜に入り敵兵引き去り、旦（朝）に達するまで屯火を設け以て我軍の衝突に備ふ。神祖諸将を召し守禦術を問ふ。大久保忠世進み曰はく「敗兵振るはず。敵愈（いよいよ）我らを侮る。請ふ、諸部の鳥銃を集め以て敵の営

を却けん」と。神祖、之を許す。城中の銃手を蒐(あつ)むるに僅かに十六人を得 松栄紀事曰、一百人。或云十六人。家忠日記・東宮記・徳川歴代・三方原合戦記皆云十六人。今従之 忠世及び天野康景・近藤登之助秀用 石見守康用子。後襲称石見守 銃乎(手カ)を率ゐ五更(暁、寅の刻) 犀磯(細い山道)に趣く。銃を発し穴山梅雪の営を却(おびやか)す。甲軍驚き譟(さわ)ぐ。多く犀磯深谷に陥りて死す。家忠日記・年譜附尾・徳川歴代○松栄紀事曰、大久保忠世建旌旗犀磯。甲軍攻之多陥深谷。按ずるに、信玄兵を行ふに豫め戦地の険易を審かにす。且(まさ)に上原能登、犀磯より浜松陣を望み其の地形を譜せんとす。此時日未だ曛(たそがれ)にいたらず。応に甲軍妄りに深谷に陥るべからず。五更営を却き騒擾して陥ちなば則ち或は之有るか。故に今上三書に従ふ 信玄の営動かず。徐(おもむろ)に曰はく「勝つと雖へども畏るべき浜松の敵なり」と。創業記・松栄紀事

二十三日、信玄獲る所の首級を犀磯に検す。凡そ三百余級 松栄紀事、或云六百級○本書曰はく「浜松の壮士穴山梅雪の陣を見るに列整はず。出て之を撃つ。信玄愈恐れ引き去る。甲陽軍鑑曰はく「二十三日、且に浜松の寡兵三方原に出でんとす。梅雪の部兵有泉大学・穂坂常陸、之を撃ち走る」と。未だ孰れ是なるかを知ら

ず。故に書かず　甲州の将佐勝に乗り浜松城を攻めんと請ふ。高坂弾正虎綱固く諫む。虎綱諸書或作昌信。今従南行雑録　信玄之に従ひ兵を引き去る。神祖、井楼に登り之を望み冨永孫太夫を召し敵の去就を問ふ。対へて曰はく「大軍後拒ぐ。輜重多からず。軍竈煙無し。此れ必ず引き去るならん」と。果たして其の言の如し。松栄紀事・三方原合戦記

二十四日、信玄軍を斂(おさ)め刑部に至り、士馬を休む。将に新歳を迎へんとす。馬場氏勝、信玄に謂ひて曰はく「前日の戦、参河の兵奴隷に至るまで格闘せざるは無し。其の屍を観るに我軍に向ひて斃るる者は俯す。浜松に背(せをむ)けて倒るる者は仰ぐ。此れ皆戦死の屍にして逃走者に非ず」と。累(かさね)て之を称(ほ)む。甲陽軍鑑・松栄紀事　石川家成懸川城門に在り。浜松の兵敗れ兵を帥ゐて至る。神祖大いに悦ぶ。是れ役なり。我兵悉く苦戦す。知名の士、死傷する者頗る多し。石川小太夫・野々山元政・安藤木工之助基能太郎左衛門家重長子・小笠原新九郎安廣按ずるに、安廣新九郎康元と同称なり。

族属考する所無し　山田甚五郎重吉・山田角之允・服部源兵衛保正・原田藤左衛門種友・近藤宮内吉成・長谷川藤九郎正長・小川傳九郎・宇野三十郎政秋・斎藤宗林・志村彌左衛門秀次・中根一左衛門正直・門奈善三郎眞友・大河原源五左衛門・渡邊十右衛門永・渡邊新九郎・牧右衛門四郎長正・鈴木傳八郎・其弟又六郎・米澤十郎左衛門・大村彌三郎・荒川甚太郎・権田久助・小笠原三郎兵衛・大橋刑部・高梨権右衛門秀政等戦死す。秀政、源太郎政頼子戦死。拠高梨系図　其最も著しき者細井喜三郎勝宗・山下七郎右衛門、馬を回し戦死す。勝宗の弟喜八郎・七郎右衛門の弟喜兵衛、各其の讐を斬り首を奪ひ見て帰る。本多正重・小笠原小五郎安勝・松原弥一郎親次・戸田光定・森川氏俊・大岡傳蔵清勝力戦し創せらる。阪部又十郎正定　酒之丞正家長子　獲を斬りて傷す。敵将土屋右衛門昌次の馬を取る。昌次、年譜附尾・三方原合戦記作直村。今従松栄紀事　乗りて帰り之を神祖に献ず。杉浦勝吉・渥美友勝・大河原正勝・山田十太夫重利・本多八蔵・秋元吉久・水野忠重・西郷孫九郎家員　孫九郎満員子。松

栄紀事作正員。今従前車後語集・松平康元家員・康元各十六歳・浅井道之助忠次・神谷與次右衛門清次・原田佐左衛門、皆首級を獲る。康元の兵金田靱負宗房戦死す。本多廣孝・康重父子騎を回し奮戦す。其兵鷹部屋架之助級を獲る。榊原康政の部兵原田権左衛門・安松矢之助・神谷助右衛門・鷹見新八郎苦戦す。獲を斬ること有り。河合久次郎敵の圍む所と為り既に危し。松平眞乗馳せ救ひ敵を撃ち之を却く。安倍忠政・長阪源二郎重信、各敵三騎を射殺す。戸田九右衛門勝則数騎を射殪す。武蔵孫之允亦善く射る。本多重次馬斃れ歩き闘ふ。敵数騎競進す。重次槍を揮ひ騎士を刺殺す。其馬に乗りて帰る。重次予め守城の虞（うれえ）に備へ軍糧を多く儲（たくわ）ふ。神祖之を悦ぶ。松栄紀事

天正元年癸酉正月、大将軍源義昭、上野中務大輔晴信を刑部に遣はす。書を信玄に賜ひ信長と与（く）ましむ。神祖講和し兵革（戦）を止めんと以（おも）ふ。信玄命を奉ぜず。是に先んじ、信長、信玄の女を以て長子信忠に妻（めあわ）すを約す。時称奇妙御曹司。後為秋田城

介。至三位中将　是に至り信玄平手汎秀の首を信長に送り、以て其の約に背(そむ)きて神祖を援くるを責む。信長使を刑部に遣はし分疏(ぶんそ)す（一っ〳〵言い訳する）。信玄聴かず遂に之と絶つ。義昭に上書し（意見を出す）信長・神祖の罪五を挙げ以て之を譖(そし)る。信長亦義昭に上書し信玄の罪七を訴ふ。是に由り二国相悪(にく)むこと水火のごとし。甲陽軍鑑・松栄紀事

七日、信玄刑部を発し本坂を経参州に入る。

十一日、野田城を攻む。守将菅沼定盈・松平忠正・設楽貞通固く守り昼夜苦戦す。敵竹牌（竹束の楯）を列ね亀甲を蒙る。今按ずるに、其の製轒轀車（ふんおんしゃ＝勢いよく突きかかる兵車）にひとし。光頭木驢相近し　急ぎ之を攻む。外郭已(すで)に破れ僅かに牙城（城内郭主将の居る所）を保つのみ。敵鹿角(ろっかく)（さかもぎ）を設け鑿(のみ)を使ひ地頭に井泉を洩らす。城中の糧竭(つ)き水涸(か)る。急を浜松に告ぐ。神祖、兵を率ゐ笠頭山に陣す。甲軍精鋭にして我軍寡少なり。戦を軽んずべからず。退き吉田城に入る。伎(ママ)小栗大六重常援兵を信長に

乞ふ。信長、信玄を畏れ出兵を肯(がえん)ぜず。定盈力屈し使を信玄に遣はす。告げて曰はく「城兵の命を全うせば則ち定盈・忠正自殺す。以て衆を救はん」と。信玄之を許す。定盈・忠正城を出て将に自殺せんとす。信玄計を設け二人を擒ふ。城兵脱去す。城遂に陥つ。信玄山縣昌景をして二人を長篠に囚へ松栄紀事云、囚於外郭。家忠日記云、郡内。蓋郭内之訛。今従年譜附尾利を啗(くら)はし降らしむ。定盈・忠正固く臣の節を守り志操撓(たわ)まず。是に先んじ山家三方の将菅沼満直菅沼伊豆満直。松栄紀事、元亀二年書菅沼正員之家臣。陪臣不応与諸将同列。疑正員之訛。然無所考定。今従本書・奥平道文・菅沼刑部・菅沼正員神祖に属す。質を浜松に納むるも叛き信玄に降る。是に至り信玄に請ひて曰はく「願はくは吾曹(われわれ)四人を以て浜松に置く所の質、定盈・忠正と易へん」と。信玄之を許す。状を浜松に告ぐ。神祖之を諾す。

二月十五日、各騎兵二千を以て護送し之を広瀬河上に易ふ。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事○松栄紀事云、護送兵各一千余騎。今従年譜・家忠日記。按ずるに、甲陽軍鑑、質を長篠馬場に易ふと。今年譜・

家忠日記・松栄紀事に従ふ。又按ずるに、松栄紀事、一説を載せ云はく「是の時信玄の甲府に幽する所の浜松の質、酒井忠次の女なり。亦浜松に送還す」と。

神祖定盈の忠誠を嘉び遠州の采地を賜ふ。松栄紀事

十六日、信玄罹疾す。山縣昌景をして野田城に拠らしめ兵を引き去る。長篠に陣し城郭を修築す。創業記・松栄紀事

兵を遣はし作手城を戍(まも)る。初め神祖遠州の地を定む。遠州の諸将多く甲州に奔り信玄に属す。信玄の遠州を略するに至り皆郷導を為(な)す。軍を旋すに及び諸将を遠州に留め余党を招集す。天方・六笠・可久輪・鳳来寺・一宮故城及び二股に拠り以て浜松に逼る。神祖、敵をして近郊に在らしむべからずと謂(おも)ふ。

三月、平岩親吉をして兵を将る天方城を攻めしむ。是に先んじ、城主久能宗政、其の族宗能の逐ふ所と為(な)る。甲州に奔り信玄に従ふに及び遠州に来天方城（森町、三倉川・太田川支流）に入るを得。修築日浅く塁壁未だ完固ならず。親吉急ぎ之を攻む。宗能(政力)支ふる能はず。又甲州に奔る。石川家成・久能宗能、可久輪城（＝各和・客輪と

も。現掛川市）を攻む。々兵（城）戦はずして走る。酒井忠次火を角屋村（門屋）に縦ち直に進み鳳来寺城を攻む。城兵出で戦ふと雖へども終に忠次の敗る所と為り城を棄て走る。六笠（向笠）・一宮二城、風を望み（遠くから評判を聞く）潰走す。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事○松栄紀事曰、一説忠次攻鳳来寺城。在一年。今按ずるに、諸書皆今年に係く。二年に係くるは恐らくは誤りなり

四月十二日、信玄の疾革（せま）る（危篤になる）。未だ甲州に至らずして信州平屋波合（長野県阿智村南部カ）に卒す。松栄紀事或云駒場　年五十三。秘し喪を発せず。子四郎勝頼其の衆を統領す。年譜・創業記・家忠日記・甲陽軍鑑・松栄紀事。按ずるに、甲陽軍鑑「信玄野田城より甲府に帰る。三月九日、疾瘳（いえ）る。兵を発し将に京師に入らんとす。十五日、濃州岩村城を攻め之を抜く。西郷山に屯し山縣昌景をして吉田城を攻めしむ。四月十二日参濃信三州の界根羽上村に卒す」と。叙事詳悉なり。年譜附尾其の説に従ふ。然して松栄紀事、甲陽軍鑑の後に在りと書き成す。蓋し拠る所有らん。故に今之に従ふ。○松栄紀事田（日カ）勢州山田の人村松芳休笛吹くに妙なり。適（たまたま）野田城に在り。毎夜笛を吹く。其の声瀏亮（りゅうりょう＝

音が冴えて明らかだ）たり。敵軍喜び之を聞く。一日兵士有り。紙を竹竿に掲げ持ち来、濠上に植（た）つ。城兵鳥居三左衛門之を怪しみ以為へらく、此或は主将来聴し之を認め標と為すやと。夜に入り芳休又笛を吹く。果して人有り来聴す。三左衛門竹竿を以て準と為し鳥銃を放ち之に中（あ）つ。敵兵騒擾す。軍中言に伝ふ「信玄、銃に中つ。病創して死す」と。創業記、一説に徳川歴代並び云ふ「信玄銃に中りて死す」と。甲陽軍鑑、其れ非ずと力弁して曰はく「世人の伝ふる所皆妄なり。仮使（たとい）銃に中りて死すとも主将の恥に非ず」と。其の説是なり。然るに松栄紀事一説、諸書載せざる所なり。蓋し本とする所有らん。附し以て攷に備ふ

臣按ずるに、武田信玄、近世名将と称する所なり。紀律正しく号令厳し。可きを見て進み難きを知りて退く。故に能く隣境を蚕食（少しずつ侵掠する）し五州に跨有（またがって自分のものにする）す。終身未だ嘗て敗衂（戦に負ける）せず。世を挙げみな知る所なり。然るに其の父を逐ひ自立すること衛輙の蒯聵（春秋時代、衛の霊公の子）を拒むより甚だし。固より大人の與らざる所なり。或者以為へらく、信虎凶暴なりて邦を保つの器に非ずして亟かに廃嫡し嗣を易へんと欲す。武田の家亦甚だ

危し。信玄已むを得ずして之を逐ひ、竟に能く対(封カ)疆（国境）を開拓す。先業を興隆するは是れ其親に孝ならずと雖へども祖先に孝なり。庸(いず)くんぞ譏(そし)るべけんやと。臣竊(ひそ)かに謂ふに、然らず。信玄の危懼する処の地当(まさ)に子の道たるを尽くすべし。邦の存亡は己の与(あず)かる所に非ざるなり。聖賢の語固(もと)より以て之に方(くら)ぶるに足らず。請ふ、戦争の世を以て之に喩(たと)へん。燕の劉仁恭自ら恃むこと彊大なり。驕侈貪暴。梁将李思安之を攻むるに及び其の子守光邦を撃つこと之非ずは則ち燕幾ど守られず。然るに守光仁恭を大安山に囚(とら)ふ。悖逆(はいぎゃく)（むほん）尤も甚だし。燕を存するの功を以て父を囚ふるの罪を解(と)くべけんや。夫れ与(とも)に逐ふを囚ふ。軽重有りと雖へども其の逆を為すは則ち一なり。斯れ以て信玄の罪を断ずべし。今川氏眞の闇弱に乗ずるに於て将佐を誘ひて其の邦をふに至れば則ち舅甥の恩蕩然として尽く。尚ほ詐力(さりょく)（嘘と暴力）して功利を貪る。信玄兵率(卒カ)を用ゐること此類なり。然れば其の行軍、陣に臨み部伍整粛なり。敵を料り勝算を制し遺策（て

おち）無し。古良将と雖へども之に過ぐる能はず。世上杉謙信と並び称す。以為へらく両雄豈に徒然たらんや（よく働いた）

六月神祖、二股城を詗察（けいさつ）（＝偵察）す。一屋を城山に築き二寨以て之に備ふ。

七月十九日神祖、兵を率ゐ長篠城を経略す。甲州の守将室賀一葉軒・小泉源二郎・吉田某等謀り我軍を襲ふ。旗を偃（たお）し鼓を臥せ寂として人無きが若（ごと）し。我軍之を怪しみ試みに火箭を射る。南風焮（たちまち）起き火勢甚だ熾（さか）んなり。城郭悉く灰燼となる。我軍勢に乗り急攻す。城将子城に退保し拒守月を踰ゆ。年譜創業記・家忠日記・松栄紀事

是の月、織田信長、大将軍源義昭を廃し之を河内に放つ。信長譜・松栄紀事

八月、武田勝頼長篠を救はんと欲し駿遠二州間に出屯す。馬場氏勝鳳来寺に出で二山（ママ）に壁す（砦をつくる）。甘利の部兵作手に壁す。武田信豊・土屋昌次黒瀬に壁し営を作手に移す。設楽に出で以て険要に拠る。家忠日記・松栄紀事　武田刑部少輔信綱、遠州を略し信綱信玄弟。初称孫六郎。剃髪号逍遥軒。甲陽軍鑑・岡崎物語作信連。今従武田系図　森村に陣す。

大須賀康高・榊原康政堀越（袋井市宇刈川右岸）に戦ひ之を敗る。獲を斬ること頗る多し。甲軍潰走す。創業記・松栄紀事 初め作手奥平氏、東三河の豪族にして士馬精彊なり。最も摧陷の任に堪ふ。神祖常に之を重んず。信玄の遠州を侵略するに及び、奥平道文叛き信玄に降る。其の子貞能志を浜松に通ずと雖へども父命に違ふ能はず。甲州に従属す。信玄の卒、勝頼の将帥の器に非ざるを知るに至り、密かに帰款を図る。甲陽軍鑑曰はく、貞能信昌父子頗る書を読む。文理に暁く癸酉年信玄必ず死するを筮知す。故に浜松に叛帰すと 時に武田信豊、黒瀬に在り。菅沼刑部の臣城所道寿、貞能の貳有るを告ぐ。信豊、貞能を召し之を誥む。貞能登時黒瀬に至る。信豊に謁して曰はく「此れ敵の詐謀にして我を間てんと欲するなり。軽信すべからず」と。談笑自若たり。信豊其の遽（うろたえる）を意はず、喜び復びは疑はざるに至る。反りて以て密謀之を告げ貞能城に帰る。予め帰款（帰服する）の期を浜松に告ぐ。其の子信昌及び部兵を率ゐ夜に乗じ作手を去り来帰す。甲州の戍兵急ぎ之を追ふ。貞能兵を反し石堂

金阪に戦ひ之を却く。神祖、松平伊忠・本多廣孝をして父子を重んじ之を迎へしむ。貞能・信昌宮崎滝山に至る。

翌日、又平岩親吉・内藤金一郎を遣はし之を援く。松栄紀事・本書不書金一郎名。按ずるに、諸士伝略、彌次右衛門家長、初め金一郎と称す。上文に在り。其の子政長亦金一郎と称す。然れども此の時尚ほ幼し。其の家長たるは明かなり 貞能兵寡きを以て滝山を去る。

二十一日、甲軍五千余騎宮崎滝山に至り将に砦を攻めんとす。貞能又滝山に至る。堞壁未だ戍(成カ)らず。纔かに柵を列するのみ。貞能出で山下に戦ひ之を破る。北(に)ぐるを逐ひ田原阪に至る。獲斬ること五十余人。神祖又本多廣孝父子を遣はし之を援く。其の軍適(まさ)に至る。貞能兵を合はせ作手に至る。甲軍城を出で拒戦す。貞能又之を撃破す。火を島田邑に放ちて還る。信昌の妻質と為(な)り甲府に在り。勝頼其の反覆を怒り之を磔殺(たくさつ)す。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事

是の月、織田信長将に朝倉義景を越前に兵攻せんとす。義景の家臣朝倉式部大輔

景鏡（孫八郎景高子。義景従父弟）義景の首を斬り出で降る。又浅井久政及び其の子長政を近江に攻め大いに之を敗る。久政・長政自殺し二国悉く平らぐ。（創業記・信長譜・織田本信長記）長篠城中器械糧食悉く焚（や）く。終に守る能はず。

九月八日、室賀・小泉・吉田三将及び菅沼正員・菅沼満直甲州に出奔す。神祖将に浜松に還らんとす。馬場氏勝・武田信豊等東南に挟撃し以て帰路を還（めぐ）らさん（とりかこむ）と欲す。神祖、氏勝の鳳来寺に在るを聞き親ら往き之を撃つ。平地に誘ひ出し決戦せんと欲して松葉を積み火を縦つ。伴（いつわりカ）に営を焼くとして兵を其の側に遁伏せしむ。甲軍煙起つを見て数騎馳せ至る。伏発つ及ばずして過ぐ。（創業記・家忠日記・松栄紀事○創業記・家忠日記及び松栄紀事一説、馬場美濃守戎事に老（経験をつんでいる）なり。煙起つを見士卒を成して曰はく「煙気白し。営を焼くに非ざれば此必ず謀有り。軽出すべからず」と。終に兵を出さず。一本徳川記抄に拠れば則ち氏勝出兵す。未だ孰れ是なるか知らず。附し以て考に備ふ）穴山梅雪・山縣昌景遠州を出で鵜飼山梨に陣し以て長篠の声援を為す。神祖、大須賀康高・榊原康政・大久保忠

世・本多重次をして之を撃たしむ。梅雪・昌景長篠城陥ち神祖浜松に還るを聞き大いに駭き、紙旗を陣営中に掲げ夜遁げ去る。武田信豊・土屋昌次亦其の謀（神祖をはさみうちにしようとしたこと）を失ひ引き去る。創業記・松栄紀事　浜松の将士相謂ひて曰はく「信玄死し未だ数月ならざるに甲軍再び利を失ふ。勝頼の武力畏るるに足らざるなり」と。松栄紀事　勝頼屡（しばしば）参州を窺ひ終に志を得る能はず。鳳来寺氏の兵を募り其の軍に導く。植村荘左衛門泰忠　新六持益第二子。初為鳳来寺別当。号安養院。神祖命使養髪。後称土佐守。拠植村系図、植村旧書上村。至持益曽孫、出羽守家正改書植村。然諸書皆書植村。蓋追書之也。今従之　其の謀を知り浜松に告ぐ。神祖、本多正重・渡邊半兵衛等を召し謂ひて曰はく「鳳来寺敵と境を接す。賊をして敵地に遁げ入らしむべからず。須らく之を生け擒りに致すべし」と。半兵衛、弟黒右衛門と謀り賊の魁首を擒へ浜松に帰る。神祖其の功の速やかに成るを褒む。家忠日記・松栄紀事　勝頼兵を遠州に出し以て久野懸川に備ふ。自ら驍騎（ぎょうき）（強い騎兵）を率ゐ見付に陣し火を縦ち村里を焚く。天竜川を渉り将に

浜松城を攻めんとす。浜松の卒勝頼の営に入り馬を盗む者有り。之を捕へ得城中の虚実を問ふ。対へて曰はく「城堅く兵は精なり。上下輯睦(しゅうぼく)なり。未だ猝攻(そつ)（速攻）に易からず」と。衆聞きて懼(おそ)る。勝頼衆心の一ならざるを慮ひ、深く入る能はず、社山を歴、山梨に出で須雲原（蟐田原すくもだがはら＝袋井市、数雲原とも）に陣す。将佐浜松の備有るを聞き班師（軍をひきかえすこと）を請ふ。勝頼曰はく「大兵境を壓(おさ)（圧）へ功無くして還る。将に之れ耻(恥)なり」と。武田信豊・馬場氏勝に命じ城を諏訪原に築き室賀一葉軒・小泉源二郎をして之を守らしめ、兵を引き甲州に帰る。家忠日記・松栄紀事　是歳、世子信康年十五歳。始めて擐甲(かんこう)す（よろいを着ける）。松平重吉其の礼を相(たす)く。参州宇理の僑人(きょうじん)熊谷某、上人(ママ)を誘ひ乱を作す。鈴木兵庫拠る所の足助城を攻め之を陥す。足助鈴木氏の世(よよ)有する所なり。神祖、世子信康をして兵を将ゐ之を撃ち走げしむ。足助城を兵庫に還し給ふ。家忠日記曰、「三月世子将兵攻足助城。武節郷主帰欵。足助城主鈴木弥兵衛不戦而走」年譜・創業記・松栄紀事皆無其事。而云世子初擐甲将兵。本書年尾亦書、世子攻足助城。蓋

其事在三月。而事実稍異。書於年尾者重復。今従年譜・創業記・松栄紀事

二年（天正）**甲戌正月朔、将士浜松城に登り元正を賀す。** 家忠日記。按ずるに、賀正の礼此に昉（はじ）むる（＝始める）に非らず。岡崎以来之有り。既に久し。旧記闕略す。本書此に至り始めて書く。明年以後往往賀正及び謡初を書く。故に此後郎（省カ）略し書かず。元寛日録に拠れば元和二年正月、台徳公、執政酒井雅楽頭忠世・土井大炊頭利勝に命じ賀正礼節を撰定す。立（たちどころに）永式と為る。今に至り江城盛礼と為る

一日夜、浜松城謡初む。 家忠日記。本書、謡初例の如し。諸士参賀す。既に例の如しと云へば則ち亦此に昉むるに非らず。雑録・岡崎事記。松平氏謡初の座次を詳載すれば則ち神祖岡崎城に在り。既に此礼有り。而して原始未詳なり。按ずるに、承応元年十二月二日、厳有公生む所の寶樹院増山氏卒す。明年正月三日に移し為し亦江城盛礼と為す。創業記曰はく「慶長十二年正月二日、江戸城謡初たり。各烏帽子素襖を著く。其の儀古雅なり。近世武将無き所なり。之に拠れば則ち其の大礼たるは知るべし

五日神祖、正五位下に叙せらる。 年譜・創業記・公卿補任・家忠日記・松栄紀事

二月八日神祖第二子於義麻呂参州産目村に生まる。故有りて本多重次家に育つ。

長じて秀康と名(なの)る。創業記・家忠日記・松栄紀事。豊臣秀吉公秀康を養ひ子と為す。結城晴朝の女壻（聟）と為る。結城氏を冑し参河守に任ぜられ結城参河守と称す。従三位権中納言に至る。越前を領す。世に越前黄門と称す。○松栄紀事曰はく「永禄十二年、神祖堀川城を攻む。吉美邑より海を渡り宇布見邑に至る。土人中村源左衛門人（入）道喜楽、船を備ふ。其の後喜楽命を奉じ秀康を撫育す。按ずるに、産目、宇布見、国音相近し。蓋し一処なり。附し一説に備ふ○創業記考異。是月武田勝頼足助に出兵す。神祖師を帥ゐ之に備ふ。然して他書見えざる所なり。故に書かず

四月六日神祖、乾城（犬居天野氏の拠点）を攻めんと欲し兵を廟(ママ)路に出し瑞雲に陣す。前鋒既に和田谷に至る。連雨に渓水暴漲し糧餉(しょう)路絶ゆ。諸将胥(あいはか)議る。「糧匱師老、深く敵地に入るは此れ危道なり。御倉（三倉＝現森町）に至り雨霽(せい)（晴れる）を待ちて兵を進むるに如かず」と。神祖之に従ふ。兵を引きて還る。大久保忠世・水野忠重殿(しんがり)を為す。乾城主天野景貫以為(おも)へらく、敵嶮隘(あい)に陥る。機失すべからず、と。乃ち民をして布護山の沢に兵せしめ銃を連ね放ち為す。前を邀(せ)め後を襲ふ。我軍気多

郷より大窪邑（浜名湖と佐鳴湖の間）に至る。且は戦ひ且は却く。堀小太郎・鵜殿藤五郎・大久保勘七郎・小原金内等二十余人戦死す。忠世・忠重還り戦ひ衆を救ふ。杉浦久蔵傷せられ退く能はず。忠世馬を授く。久蔵徒歩にて退く。忠世隘路を過ぐ。奴をして背族（矢たば）を執（と）らしむ。塗金揚羽蝶。忠世常に負ふ所なり 敵兵五六人谷中より出で之を奪ふ。忠世敵二人を斬り背旗を取り腰に挿して還る。榊原康政奮撃し敵を却け首を獲ること数十級。御倉亦険要の地に非らず。神祖兵を斂（おさ）め天方（現森町、三倉川と太田川支流の川辺）城に入る。

五月二十七日、武田勝頼遠州を侵し高天神城を攻む。守将小笠原氏儀向阪牛之助光行をして急を浜松に告げしむ。光行囲を冒し往くこと凡そ三たびに及ぶ。牛之助使を為す。雑録牛之助事記に拠る

六月十日、神祖兵を将ゐ之を救ふ。小栗重常をして援を織田信長に乞はしむ。信長・信忠父子、兵二万余騎を師ゐ岐阜を発す。

十七日吉田に至る。勝頼、援軍至るを聞く。之を邀撃せんと欲し小山に営す。前軍城に薄り急攻す。氏儀及び渡邊金太夫・林平六等拒守す。初め氏儀、岡部丹波・岡部正綱と今川氏真に属す。勇を以て聞こゆ。是に至り互に其の名を呼び争戦す。勝頼の将内藤修理昌豊及び岡部正綱・弟治部・忠二郎等兵を督(まと)め疾戦す。正綱外郭に進攻し之を破る。治部及び朝比奈金兵衛先登し戦死す。忠二郎・鈴木彌二右衛門等相踵し(次々と)隍(ほり)を渉り堞(へい)を登り遂に其の一面を破る。城兵堅守し不屈なり。氏儀の勇、余有りて操守無し。勝頼利を啗はし之を誘ふ。氏儀終に叛す。勝頼の兵を引き城に入る。金太夫・平六等亦降る。信長今切渡に至り城陥(お)つるを聞き還り吉田に至る。神祖往き之に謝す。年譜・創業記・家忠日記・織田本信長記・信長譜・松栄紀事　信長、神祖を労(いた)はりて曰はく「頻(ひん)年勝頼 数(しばしば) 辺境を擾(みだ)す。卿の威武を頼みて我東顧の憂無し。遂に四方を経略するを得。遠参二州去年稔らず。国用頗る匱(とぼ)しと聞く。今不典(てん)（贈り物が粗末でわずかだ）と雖へども黄金二袋を贈る」と。将士に頒け給ひ以て

戦功を奨(ほ)む。帰るに及び貞宗の短刀を吉田城守酒井忠次に賜ふ。甲陽軍鑑曰、黄金二百枚。創業記曰、黄金一駄。時人皆駭。家忠日記・織田本信長記・信長譜・年譜附尾・松栄紀事並曰、盛黄金於二革袋。毎一袋二人捧之。今従之 勝頼氏儀を賞め一万貫の采地を給ふ。時の人其の反覆を悪まざる莫きなり。家忠日記・松栄紀事 是に先んじ氏儀の重臣任子を浜松に送る。故に外に服従すと雖へども内実は貳(ふたごころ)を懐(いだ)く。是に至り事露はる。神祖、氏儀の臣福島十郎左衛門父子・安西越前を誅し其の余の隷する麾下を宥す。創業記

八月神祖、馬伏塚の故墨(まむしづか城)を築き大須賀康高をして之を守らしめ以て高天神城に備ふ。氏儀の采地を康高に賜ふ。家忠日記・松栄紀事 是の春、勝頼兵を美濃に出し信長管内の十八城を攻め抜く。夏、高天神城を陥とす。軍勢大いに振ひ其の心驕汰なり。以為へらく勇武已に若(し)く者無しと。佞臣長坂釣閑斎・跡部大炊助勝資其の悪に逢ひて之を助長す。士民を虐使し兵(軍備)を佳くすること已まず。浜松を先攻せんと欲す。

九月出て遠州を侵す。大雨連日なり。天竜川大いに漲り輒ち渉るを得ず。勝頼見付府より進み河上に陣す。浜松の将士鳥居元忠・大久保忠世・其の弟忠佐・成瀬正一・内藤正成・柴田康忠・榊原康政等三十騎可(ばか)り出て形勢を候(うかが)ふ。甲軍板垣某の部兵五騎　按ずるに、板垣駿河信方子彌二郎信憲。此前既に死す。板垣甲府の重臣。此時未だ誰たるか知れず。蓋し其の族をして兵衆を統(おさ)めしむるなり　進み将に河を渉らんとす。候騎馬を躍らせ河に入り之に逆撃せんと欲す。敵渉るを得ずして還る。候騎直ちに前(すす)み勝頼の陣に向かふ。甲軍朝比奈駿河の部兵三騎進み河に入る。勝頼寵臣土屋惣蔵昌恒　昌恒、右衛門昌次弟　に謂ひて曰はく「板垣の兵渉る能はず。而(しか)るに三士渉らんと欲す。其の志心死に在り。渠(かれ)をして死に就かしむるは是吾が恥なり」と。麾を秉(と)りて進む。昌恒疾く馳せ水を渉る。甲軍二万余流を絶ち争進す。水之が為に溢る。下流頗る浅し。山縣昌景の一軍先づ渉る。浜松の候騎急ぎ退き後軍と合ふ。馬場氏勝、昌景と並び進む。羽柴(橋羽カ、天竜川支流安間川中流右岸)上間に陣し衆軍の至るを待つ。

神祖騎兵七千を率ゐ九隊に分け為す。四千を親ら将ゐ小天竜に陣す。酒井忠次・石川数正・松井忠次等三千騎下流に陣す。敵の小天竜を渉るを待ちて横から之を撃たんと欲す。勝頼の将校吾軍の厳整にして交鋒すべからざるを知りて、勝頼に軍を旋し二俣城に入るを勧む。井伊谷を歴還り信州伊奈に至る。神祖、兵を収め城に入る。年譜・創業記・甲陽軍鑑・家忠日記・松栄紀事

三年乙亥正月十七日夜、天野康景婟（たかぶ）り連歌発句を夢みる。其の詞吉兆有り。明日康景之を神祖に白（もう）す。神祖命じ是月二十日を以て鎧供（そな）へを賀す日とす。一百句を足し為し之を祝（ことほ）ぐ。是夏、長篠の大捷（＝勝）有り。以て禎祥（ていしょう）（天の瑞兆）と為す。毎歳正月二十日連歌会有り。遂に恒式と為る。家忠日記、以夢発句為二月十七日夜、誤。今従松栄紀事。按ずるに、慶安四年正月二十日。大猷公薨ず。明年鎧を移し供へ、連歌会を賀す。十一日と為し今に至る、此の如し

二月神祖、鷹を浜松城下に放つ。一童子の容貌閑雅（みやびやか）なるを見誰れの子

かと問ふ。対へて曰はく「小子萬千代なり。井伊肥後守直満の孫、肥後守直親の子なり。継父松下源次郎に依り城下に在り」と。神祖之を問ひ驚き即ち城に召し入る。井伊谷旧邑を賜ひ三人衆を以て部属故の如くに為す。（按ずるに井伊谷三人衆、近藤康用・鈴木重時此時既に死す。康用子秀用・重時子重好家を嗣ぐ。唯だ菅沼忠久存没考する所無し）又木俣清左衛門守勝・椋原次右衛門・西郷藤左衛門をして之を保護せしむ。萬千代時に十五歳。名は直政（後任兵部少輔。至従四位下侍従。為江州佐和山城主）長じて将帥の器有り。遂に元勲良佐と為る。（家忠日記・松栄紀事）初め岡崎の奴隷大賀弥四郎敏捷にして吏才有り。労を積み登庸せらる。二十余県の賦税を掌（つかさど）り家富み族盛んなり。竊（ひそか）に不軌を図る。小谷甚左衛門・倉地平左衛門・山田八蔵と結び党を為（な）し連名状を以て武田勝頼に告げて曰はく「寡君（我君）岡崎に至る毎に必ず彌四郎をして門を啓（ひら）かしむ。公（あなた様）能く師（軍）を潜（ひそ）めて来たらば則ち城得べきなり。長子信康岡崎を守ると雖へども城中有る所の皆浜松の将士の質なり。而して闘兵甚だ寡し。将士城陥つるを聞か

ば則ち妻孥を春恋し皆闘志を無くして来降必なり。縦ひ降らざる者有るも二百余人を過ぎず。離析迸散して佗（＝他）州に奪す。豈に能く浜松を保たんや。一挙して志を得べきなり」と。勝頼大いに喜び期を刻み兵を発す。八蔵悔悟し以為へらく君を弑すは大逆なり。天地容れざる所なりと。乃ち城に入り其の謀を告げて曰はく「儻し臣の言を疑はば請ふ人を遣はし臣の室に就き其の謀を内聴せよ」と。八蔵、彌四郎を招き反計を定む。世子（信康）密かに人を遣はし之を聴く。審らかに其の実を得以て浜松に告ぐ。輒ち弥四郎を逮へ急ぎ之を縛す。頸を馬上に鎖し之を戻し罪状を幟に書き其の背に植つ。浜松に徇ふ（連れて行き見せしめにする）。先づ妻子五人を念子原に磔にす。彌四郎之を見戦栗（＝慄）す。又岡崎に押し至り道路に徇ふ。之を生き埋め竹鋸を以て之を鋸く。七日にして死す。方に八蔵の自首するや。平左衛門事覚するを知り逸れ去る。収へて之を斬る。甚左衛門走り遠州国領郷に至る。渡邉守綱将に之を捕へんとす。甚左衛門善泗天龍川に投じ泳ぎ二股城に至

り遂に甲州に奔る。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事・東照宮遺訓

臣按ずるに、軍国、事多く必ず理財の臣を資(はか)り、然る後に能く辺陲(すい)（国境）を経略するを得て彊敵を控(こう)制（取り締まる）するなり。昇平の世（国運が盛んで平和なこと）既に闕くべからず。矧(いわん)や疆場に於いてをや。飛輓芻粟を慮るの日多し。然る理財の臣之を簡すること（任命すること）実に難し。精敏（もの知り）捷給(しょうきゅう)（弁が立つ）の者、邪正叵測(はそく)（はかり難い）なり。詳審（こまやか）暢達（のびのびと）の者、忠佞弁(わ)け難し。苟しくも人君能く心術の微を燭(てら)して公私の分を察するに非ざれば、則ち之の惑ふ所と為らざること鮮(すくな)し。（君主が識別力がなければ之に惑わされないことは少ない＝だまされることが多い）大賀彌四郎吏胥(りしょ)（＝胥吏、下級の役人）の賤を以て賦税の重を掌る。神祖、之に委任して邦人皆以て能しと為す。此必ず精敏詳審、其の才人に過ぐる者有りて心術正からず。権要に賂(まいな)ひ以て誉とす。左右に媚び以て美を掠(かすむ)む（他人の名声をかすめ取る）。蓋し小人の欲溪壑(けいかく)（大きな谷）盈(み)ち難し。飛揚跋扈の才に非らずして陰に蛇虺(き)

（まむし）蜂蠆の毒を蓄ふ。妻子を豢養（かんよう）（やしなう）し宗族を庇護す。是れ誰の力ならん。而（しか）るに其の志猶ほ歉（あきたら）ず非望を覬覦（きゆ）（身分不相応にのぞむ）し覆燾（ふくとう）（天が万物をおおい育てる）の恩を忘れて弑逆の計を為す。同悪相済（な）し敵国に通謀す。幸いにして山田八蔵幡然（はんぜん）として悔過し自首し状を告ぐ。然らずんば則ち肘腋（ちゅうえき）（近いところ）に変生して其の禍殆ど将に不測ならんとす。之を極刑に寘（お）く、未だ其罪を償ふに足らざるなり。岩淵夜話に拠れば、神祖常に近臣と此事を譚（かた）り以て戒と為す。亦以て神祖寛大の徳を見るべきなり。

勝頼、兵二万を率ゐ参州二連木に至る。織田本信長記曰、三月下旬勝頼率兵出於足助。織田信忠将兵赴之。蓋此時事也。然他書無所見。附以備考 彌四郎の敗るるを聞き怒りて曰はく「遽（にわか）に兵甲を興し功無くして還る。我為さざるなり（成就しなかった）」と。

四月二十一日。松栄紀事一説五月朔。年譜・創業記・家忠日記及紀事、正文皆作四月二十一日、今従之 長篠城を囲む。環（めぐ）りて之を攻む。

五月六日、兵を分け二連木・牛窪を劫略し（おびやかす）将に吉田に逼らんとす。神祖吉田外郭に屯す。勝頼の兵の至るを待ちて戦はんと欲す。世子山中法蔵寺に軍す。勝頼勁（けい）（つょい）騎一万を率ゐ小山に陣す。浜松の諸将以為へらく、敵兵我に倍す。野戦に宜しからず。軍を還し城に入るに如かず。其の守備を厳め敵至るを待ちて決戦せん、と。神祖之に従ふ。酒井忠次殿（しんがり）を為す。甲軍の前鋒山縣昌景五隊を率ゐ吾軍を長躡（ちょうじょう）す（おいかける）。忠次還り闘ふ。戸田左門一西は（吉兵衛氏光子）甲軍廣瀬郷左衛門景房と、大津土左衛門は三科傳右衛門形幸と槍を接す。（勝頼滅後神祖景房・形幸を以て井伊直政の部兵と為す。景房美濃と称し形幸肥前と称す）孕石源右衛門・小菅五郎兵衛、形幸を助けて来闘ひ暮に抵（いた）り解き去る。明日景房又出づ。忠次吉田街口に接戦すること凡そ三たび。互に言を以て相証す。甲州壮士、景房を助け競進す。水野忠重・戸田一西・渡邊守綱等三十余人奮撃し勇を争ふ。景房馬を盤し兵を収め徐徐にして去る。衆皆其の膽勇余有て騎乗に工（たく）みなるを称ふるなり。勝頼日夜長篠城を攻

む。奥平信昌及び援軍の将松平伊昌、衆を励まし固守す。神祖之を救はんと欲し小栗重常をして援を織田信長に乞はしむ。信長之を許す。而るに兵を出さず。甲軍城を攻むること甚だ急なり。神祖又重常と信昌の父貞能とをして岐阜に祗(抵)らせ急を告げしむ。信長乃ち出師す。

十一日、城兵南門に出で敵と戦ひ之を却く。攻具を奪ひ竹牌を焚く。

十三日夜、敵瓢丸を攻むること甚だ急なり。城兵拒戦す。敵兵の死傷甚だ多し。然るに塁壁破壊し終に保つべからず。故に瓢丸を棄て夜に乗じ退き第三城に入る。敵又攻具を設け地道を鑿つ。攻撃余力を遺さず。

十四日、信昌衆に謂ひて曰はく「糧匱しく数日を支へ難し。誰か能く城を出て援兵に趣かん」と。衆相顧み敢へて応ずる者莫し。鳥居強右衛門進み曰はく「吾能く之を為さん」と。信昌悦び神祖に告げしめて曰はく「城郭完からざるに非らず。天炮足らざるに非らず。乏き所の者は唯だ糧のみ。若し急ぎ之を救はずんば則ち

信昌自殺し以て士卒の死に代へん」と。強右衛門夜に乗じ囲を犯して出づ。明旦燧を前山に挙げ之を報(しら)す。城兵皆悦ぶ。其の夕強右衛門神祖の営に抵(いた)り状を告ぐ。神祖面し命じて曰はく「十三日、信長既に岐阜を発つ。吾亦兵を発し援に赴かん」と。強右衛門夜を冒し遽ぎ帰る。

十六日、長篠城下に至り間を伺ひ城に入らんと欲す。甲軍其の行の纏色(てん)（まとう色）異なるを怪み之を執(とら)ふ。勝頼、逍遥軒信綱をして之を諭さしめて曰はく「吾言に従はば則ち汝に厚く醻ゆ。否(しから)ずんば則ち汝を死す。城下に至り相知る者を呼び宣言せよ。『信長来援する能はず。須く速やかに出降すべし』」と。強右衛門伴(伴カ)り諾す。勝頼壮士十余人をして城下に引き至らしむ。強右衛門大いに呼ばはりて曰はく「岐阜・浜松の大軍来救す。既に近くに在り。坰(はな)ること三日を出でず。当に大捷を得べし、努力し堅守せよ」と。言未だ畢(お)はらざるに甲軍槍を攢(あつ)め之を刺し柵前に磔にす。両軍の士知ると知らざると與(とも)に其の忠烈を称めざるは莫きなり　年

臣按ずるに、鳥居強右衛門、右之解揚（楚の荘王に対し偽りの承諾をした）なり。揚、晋の景公の命を受け以て出で死有り。霣（見捨てること）無くんば、則ち其の死を視ること帰（自然）の如し。（『左氏伝』）決烈知るべくして之を舎て、以て帰するは楚の荘王の仁なり。東漢閻温の馬超に於ける、東晋周崎の魏人に於ける、唐劉感の薛仁杲に於けるがごとし。皆其の言を反し以て命を成す。亦揚の徒（仲間）なり。温、超の殺す所と為る。崎、人の殺す所と為る。感、仁杲に之を膝に至るまで埋められ、騎を馳せ射殺さる。強右衛門、武田勝頼の磔する所と為る。惨酷の極み殆ど感と相類するなり。強右衛門唯だ生を舎て義を取るを知るのみ。勝頼の我を賂ふ、命を知らざるなり。是故に決然として之を行ひて疑はず。毅然として之に処して顧みず。今に至り凛々として猶ほ生気有るがごとし。豈に烈文夫に非らざらんや（何と立派な男ではないか）。援軍大いに至る。勝頼崩壊す。果して其の言

の如し。奥平信昌拒守の功を以て世茅土（領土）の封を受く。強右衛門事ふる所に忠にして当時に功有り。忠臣義士何代之無からん、之を四子（解ら右の四人）に較ぶ。殆ど焉に過ぐる有らん。貞能・信昌死士を愛養し竟に其の刀を得。父子の将略亦以て概見すべし。神祖、信昌を器重して竟に東床の選良と與に以ゐる有るなり。

敵将馬場氏勝・内藤昌豊・山縣昌景・小山田信茂・原隼人胤長、勝頼を諫めて曰はく「家□・信長兵十万を将ゐ来援すと聞く。戦必ずや不利なり。両将未だ到らざるに及び、囲を解きて去らば則ち彼空手にして計を失せん。然らずんば蟻附し（蟻のように城壁をのぼる）城を攻めん。我兵多く死すと雖へども城既に陥ちなば則ち具勢（持っている軍勢）に乗りて軍を甲府に還さん」と。勝敗の機此に二途在り。長阪釣閑・跡部勝資大言して曰はく「二子の来るは天幸なり。将に一挙に之を殲ぼさん」と。勝頼之を然りとす。誓ふに旗・盾無しを以てし。必ずや逆戦せんことを期す。按ず

るに、白旗盾無しの鎧の刑部丞源義光以来武田家嫡嫡相伝ふ。以て重器と為す。誓ふに此二物を以てすれば則ち必ずや其の吉を踐む（実現する）諸将復びは諫むる能はず。憤撃し皆一死以て国に報ぜんと謂(おも)ふ。家忠日記・甲陽軍鑑・松栄紀事

十八日、信長設楽極楽寺に進軍し、信忠御堂山に屯す。織田本信長記・家忠日記・徳川記・松栄紀事 神祖高松に陣す。羽柴秀吉・滝川一益・丹羽長秀荒海原に陣す。別将十三軍高きに拠りて陣す。適(たまたま)城兵鈴木金七、信昌の書を齎(そろ)へ来たりて曰はく「勝頼急攻せば則ち城中鐘を鳴らし之を報す。城猶ほ固守するに足る。慎みて軽戦する勿れ。敗を取らん」と。神祖報を聞きて喜びて問ふ「汝如何(いか)にして出づる」と。対へて曰はく「夜密かに城に縋(なわか)けて出づ。敵綱を濠中に設け鈴を繋ぎて守る。臣短刀を以て綱を截り水底に潜行して来たり」と。神祖金七をして信長に謁せしむ。信長之を聽き亦悦ぶ。初め勝頼道虚寺山に管(菅カ)し将佐をして長篠城を攻めしむ。援軍至るを聞き騎兵二千を分け、小山田備中昌行・高坂源五郎・室賀一葉軒をして

之を督(とく)せしめ、長篠城に備ふ。又二千を分け武田兵庫頭信実を以て将と為す。信実、信虎第六子、信玄弟 三枝勘解由左衛門守友・名和無理之助・五味與三兵衛・飯尾弥四右衛門之に属し徳川記・松栄紀事、飯尾作井伊。今従甲陽軍鑑 鳶巣山城を守る。是に先んじ小栗某故有て岡崎を去り勝頼に事(つか)ふ。適(たまたま)京師に使して還るに本多忠勝の営を過ぐ。起居(ママ)神祖。忠勝、神祖に謁せしむ。以て密計を授く。帰り勝頼に報じて曰はく（「起居～曰はく」までの間に脱文有りカ）「信長、甲州の武威を畏れ樹柵設塹守備の為に計る。公若し兵を出し之を撃たば勢摧朽(さいきゅう)（腐ったものをくだく）の如きなり」と。勝頼喜び自ら諸部を率ゐ瀬沢川を渡る。進むこと二十余町原上に陣す。十三隊に分け為し背水して陣す。意を決し必戦す。馬場氏勝・眞田源太左衛門信綱海野小太郎幸氏孫、弾正忠幸隆長子、幸隆更眞田氏。松栄紀事、信綱作則之。今従眞田系図 ・其の弟兵部昌輝・土屋昌次・穴山梅雪・一條右衛門大夫信龍 信虎第七子。信玄弟、初称藏人 合はせて六隊大宮前を封ず。佐久間信盛・木下秀吉・明知光秀右軍を為す。逍遥軒武田信綱の将内藤昌豊・原胤長・安

中左近・和田左衛門、五感・永倉・白倉・松本等陳する所に対す。柳田・滝川一益等中軍を為す。武田信豊諸書皆書典厩而無名。故嫌於其父信繁。按ずるに、信繁永禄中川中島に戦死す。其の子信豊左馬助を襲称す。此所謂典厩者、信豊也の将山縣昌景・小笠原掃部助信嶺左衛門佐信貴子、初称十郎三郎松岡某・小山田右兵衛・跡部勝資・甘利三郎四郎・小幡兄弟等本盡書小幡兄弟。而無名。盡上総信真也。見下文正楽寺前竹廣に対す。神祖の兵左軍を為す。勝頼の麾下、前隊望月甚八郎、後隊武田左衛門亦神祖の兵に対す。酒井忠次・本多廣孝相謂ひて曰はく「今勝頼を誘ひ死地に陥さば我軍必ずや勝を得ん」と。一本徳川記抄・松栄紀事○徳川記抄載。一説曰はく、「初め勝頼小栗某をして岡崎に到らせ神祖の出軍を覘（うかが）はしむ。小栗、忠勝の営に来、其の実を告げ、且は曰はく「公若し旧罪を赦さば則ち請ふ反間（敵国に入りさぐる）を為さん」と。忠勝神祖に告ぐ。神祖之を座に居き間に盃を賜ひて曰はく「汝帰り勝頼に報せよ。家□長篠城を救はんと欲し援兵を信長に乞ふも信長肯んぜず。既に家□一人の力の能く及ぶ所に非らず。又吉田城を攻むるを恐れ頻りに守禦の計を作す。復びは出軍の意無しと」。小栗踐言（言ったことを実行する）を神に誓ひ抵して去る。小幡景憲紀事曰はく「初

め神祖、奥平貞能・石川数正をして岐阜に到らしめ援兵を乞ふ。信長之を毛利河内に問ふ。河内曰はく「不可なり」と。又佐久間信盛に問ふ。信盛曰はく「今長阪釣閑に通諜し甲州の武威を畏るるを示し勝頼して自矜せしめば則ち必ず勝を取らん。公臣を疑はずんば則ち其謀を為さん」と。信長之を許す。信盛使を釣閑に遣はし刀劔を贈りて曰はく「信長甚だ甲軍を畏る。公若し軍を進め急ぎ之を撃たば勢摧朽の如し。勝たば則ち我甲軍に降らん。君に請ふ、我を棄つる莫かれ」と。釣閑喜び勝頼に告ぐ。勝頼老臣の諫を用ゐずして戦を決意す。然る後に信長出師す。行路遅滞し恐懼の状を作す。又諜をして流言せしめて曰はく「甲兵の一人は織田の兵数人に当る。樹柵設塹。守備の計を為す」と。故に勝頼全く其の計に墮すなり。二説各異なりて其の謀相同じ。未だ知らず、孰れ是なるかを

十九日夜、信長諜を遣はし敵を覘ふ。暁に及び帰りて曰はく「甲州の陣営甚だ厳整なり。凛として犯すべからず」と。

二十日、又数人を遣はし之を覘ふ。復た此の如し。尾州の将佐相顧み色を失ふ。晡時信長諸将と会し之を議る。神祖亦焉に赴く。信長、酒井忠次を召し其の状を問ふ。対へて曰はく「臣昨日より今日に至り間諜数輩を遣はし之を覘ふに勝頼兵多

からず。明日の戦必ず利有り」と。信長大いに喜びて曰はく「海道第一の勇者酒井左衛門尉能く敵の情状を得。勝を取るは吾掌中に在り」と。杯酒を忠次に賜ふ。其の杯を信忠に進ましめ忠次に謂ひて曰はく「子、善く撈蜆（しじみ取り）河舞を為すと聞く」と。撈蜆河、諸書皆作夷舞。按ずるに、酒井系図十一年、神祖、女を北條氏直に嫁がす。十五年、氏政宴を黄瀬川上に設く。忠次撈蜆河舞を為し、氏政悦び佩刀を贈る。撈蜆河、夷と国音相近。故に訛り夷舞と作す。今此に拠り之を訂す 今我の為に之を為し、以て士気を佐けよ」と。衆皆箙を敲き之に和す。舞関み軍事を議る。諸将皆黙す。忠次進みて曰はく「此戦専ら寡君の安危を繫ぐ。故に敢へて蹤等（身分をとびこえて）して言ふ。今夜間道を歴、鳶巣山を襲ひ火を縱ち後軍を劫略（おどして奪う）せば則ち彼必ず敗衂せん（負ける）」と。信長之を怒叱して曰はく「始め吾、子を以て兵を知ると為す。今何たる策の謬や」と。忠次忸怩として退く。家忠日記・年譜附尾・松栄紀事、本文並曰、忠次進計神祖。神祖然之。使至信長営告之。信長叱之云云。今従紀事一説及甲陽軍鑑 既にして信長密かに忠次を召し謂ひて曰はく「子の策甚だ

善し。吾、謀の泄(も)るるを懼る。敵或は之を聞く。故に衆中に於て陽(いつわ)り怒り以て之を黜(しりぞ)く。今鳶巣を取るに誰か能く之に任ぜん」と。対へて曰はく「忠次能く其の地形を知る。即ち郷導を為さん。請ふ、兵を以ゐ従へ」と。信長金森五郎八長近・佐藤六佐衛門及び前軍の将青山新七郎・加藤一左衛門をして之に従はしむ。忠次に命じて曰はく「登山せば即ち燧を挙げよ。」と。忠次営に帰らず直ちに鳶巣山に趣く。神祖松平伊忠・其の子家忠・本多廣孝・其の子康重・松平清宗・牧野康成・松井忠次・菅沼定盈・西郷家員・阿倍四郎兵衛定次等をして騎兵三千を率ゐしむ。両群合はせて八千余。定次戎(じゅう)（戦）事に老練なり。故に其の選に與(あず)かる。奥平貞能・名倉喜八郎を以て郷導と為す。中夜険を冒し鳶巣山に赴き以て天明を俟つ。信長・神祖の兵合はせて七万。神祖前軍を為す。尾州の諸将左右に陣す。佐久間信盛左軍を為し羽柴秀吉・滝川一益右軍を為す。一本以信盛為右軍。秀吉・一益為左軍者誤 信長・信忠中軍を為し之に継ぐ。信長、神祖と甲軍の騎戦に長ずる（すぐれている）を議る。「勝

頼勇を恃み遠略無し。彼必ず騎を馳せ衝突せん。我軍宜しく柵を列ね数千の銃手を以て之を撃つべし」と。夜卒を樹柵に衆(あつ)むるを命ず。

二十一日黎明、銃手三千を選び分け三隊と為す。滝川一益・木下秀吉・丹羽長秀銃手一千第一柵を守る。前田利家・佐々内蔵助成政銃手一千（守第二柵　脱カ）、福富平左衛門・塙九郎左衛門・野々村三十郎幸政（主計頭幸之子）銃手一千第三柵を守る。令して曰はく「敵来たるも濫発する勿れ。九歩十歩間に至らば一千銃毎に之を遞(てい)（次々と）放せよ。進退は敵に随ひ彼をして暫しも休ましむる勿れ。中軍、遊軍、左右、前後各守備を厳(いまし)め号令を聴かずして柵外に出づるを禁ず」と。又兜鍪(とぼう)（かぶと）を河尻與兵衛秀隆に賜ふ（後称肥後守。然諸書或書肥前守。雑糅（ざっじゅう＝いりまじる）無所取決。拠其子亦称肥後守則肥後為是。年譜附尾曰、名重吉。今従先臣域所友仙訂正）信忠の営に至り之を戒めて曰はく「慎み浪戦する勿れ。事毎に必ず與兵衛と之を謀れ」と。神祖亦柵を軍前に引く。三十歩毎に一口を設く。又三十歩毎に柵を竪て列べ以て甲軍の縦横に馳突するを

防ぐ。精兵善く銃(う)つ者三百人を選ぶ。大久保忠世及び弟忠佐を以て前鋒と為す。柵外に出で以て之を監る。本多忠勝軍監を為す。忠勝軍監拠創業記・本多系図 忠佐、忠世に謂ひて曰はく「尾州は援兵なり。浜松は主兵なり。援兵先に戦はば則ち主兵の耻なり。請ふ、我に従ひ始めん」と。忠世之を然りとして神祖に白(もう)す。神祖之を聴く。家忠日記・徳川記・大久保系図・松栄紀事 成瀬正一往年武田信玄に事(つか)へ数年して帰り麾下に事ふ。故に能く甲軍の旗幟(きし)軍装を審(つまびらか)にす。神祖前隊に在らせ以て之を物色せしむ。一つとして爽誤(そうご)（符合しない）無し 成瀬系図・松栄紀事 既にして信長の軍大銃を放ち敵前隊を刼(おびやか)す。歩兵槍を揮ひ挑戦す。甲軍魚貫（一列になる）して進む。徳川記・年譜附尾並云。甲軍放大炮挑戦。今従代々記・松栄紀事 山縣昌景勁騎三千、鳴鼓来攻す。我兵鳥銃を斉放す。敵兵沮まず。左右馳突す。忠世・忠佐陣に臨み督戦叱咤風生(ふうせい)（激しく闘う）す。昌景の驍兵小菅五郎兵衛・廣瀬景房・三科形幸衆に抜きんで力戦す。敵兵創せられ稍(やや)退く。我兵勢に乗り競撃す。昌景余力を遺さず血戦十三次。大喊(かん)して

進む。銃手三百左右均しく発す。昌景の兵死する者半ばを過ぐ。昌景の勇気撓(たわ)まず衆を厲(はげ)まし直ちに神祖麾下の柵に逼る。本多忠勝其の昌景たるを知り銃手をして之を狙撃せしむ。昌景鉛に中(あた)り馬より墜ちて死す。（勇士一言集曰、関西人、大阪新助。乃於鳥銃往仕麾下。長篠之役、放銃斃昌景）部兵志村又右衛門其の首を収めて去る。逍遥軒信綱相継ぎて進む。前隊の銃手均しく発す。信綱敗走す。原胤長・小山田信茂・跡部勝資・望月甚八郎・安中左近等競進し又敗走す。小幡上総信眞（松栄紀事作信貞。今従信長譜）・武田信豊・甘利三郎四郎等相継ぎ柵を破らんと欲す。大久保忠世・忠佐・石川数正・内藤信成等銃手に令して曰はく「敵鋒甚だ鋭し。宜しく溝塹を阻(たの)み其の近くに待ちて斉(そろ)へ発すべし。」と。敵兵三百余銃声に応じて斃る。余衆魄褫(はくうば)はれて敗走す。是に先んじ、忠世・忠佐馳逐(ちちく)（馬で早く追いかける）周旋し健闘すること八九次。信長遥かに其の背旗を望みて曰はく「彼何人なるや。馳騁倏忽(ちていしゅくそう)（すばやく馬を走らせる）縦横自在。其の衆を督(とく)すること臂(ひじ)指を使ふが如し。屈伸手に在り。其の敵に応ず

ること膏瘡を傅(まも)るが如し。連綴(てつ)して離れず」と。人を遣はし之を問ふ。神祖報へて曰はく「是れ我譜第の士大久保兄弟忠世・忠佐なり」と。信長、神祖の能く人を得るを嘆じて曰はく「吾如からざるなり」と。佐久間信盛兵五千 一本作六千余 滝川一益兵三千各出でて柵外に陣す。神祖使を遣はし之を扼(おさ)ふ。信盛・一益聴かず。神祖馬を馳せ其の不利なるを信長に告ぐ。信長之を然りとし、使を二人の陣に遣はし之をして柵内に退陣せしむ。使来至る。馬場氏勝、左軍の敗るるを見、急ぎ進み信盛の兵を撃つ。信盛支ふる能はず、柵内に退き入る。死者四十三人。氏勝信盛の初め布陣する所の岡阜を奪ふ。隊を整へ旗を竪(た)て以て士馬を休ましむ。諸書或曰、佐久間信盛為山縣昌景被破。又云昌景横撃破他陣。皆非也。昌景始終在正楽寺前竹廣。与神祖麾下之士、力戦而死。与信盛之陣相去甚遠。其誤明矣。今従一本徳川記抄 尾州の銃手一千鳥銃を斉(そろ)へ放つ。滝川一益の兵三千出で敵兵を撃つ。甲軍内藤昌豊の勝兵一千急ぎ馳せ之を突く。一益亦柵内に退き入る。木下秀吉・丹羽長秀銃手を指揮し千銃斉へ発す。眞田信綱・其

の弟昌輝・土屋昌次合兵五千弟(第)三柵を攻む。諸将胥議(あいはか)る「敵甚だ剽悍(すばやくて強い)なり。尾州の銃手宜しく銃を斉へ放つべし」と。我兵大喊し長槍短刀にて急進し之を撃つ。約既に定む。信綱・昌次の麾衆急進し前軍胆気益(ますます)壮なり。三千の鳥銃一時に斉へ発す。信綱・昌次死傷を顧みず馬を馳せ衝突す。前田利家・塙九郎左衛門(更称原田備中守)・福富平左衛門・野々村幸政柵内に引き入り銃手を激励す。雷震雨注。甲軍の死者麻の如し。我軍の前鋒大呼して奮撃す。本多忠勝・平巖親吉・鳥居元忠・大須賀康高・石川数正・榊原康政・松平忠正(諸書無忠正。今拠櫻井松平系図。補之)踴躍し陣を陥す。縦横に馳せ突き、甲軍大敗す。初め昌次信玄の死に殉せんと欲し高阪虎綱諫め之を止む。是に至り自ら姓名を呼び戦死す。信綱・昌輝、従兵と柵本を抜き競進す。重創して死す。渡邉半十郎政綱、信綱の首を獲る。(政綱半藏守綱弟)我軍挟撃す。敵兵五千之を殲(ほろぼ)す。馬場氏勝未だ一創も被(こうむ)らず。猶ほ決戦せんと欲し(甲陽軍鑑曰、馬場美濃自少壮歴大小数十戦、至死未掌被創。按ずるに、大久保家譜、治右衛門忠佐少年よ

り大小数十戦、鉾刃屡（しばしば）金革に中（あ）つると雖へども身未だ嘗て一創だに被らず。世人多く氏勝を称む。而るに忠佐を知らず。亦此如し。故に此に附す 勝頼の麾下の兵を招く。原胤長・小山田信成等の兵数千前に来たり。佐々成政、信長に告げて曰はく「勝頼の陣旌旗動揺す。敗走の機既に見ゆ。請ふ、一軍を以て前鋒を益さん」と。信長、湯浅甚助直宗をして滝川一益に命ぜしめて曰はく甚助名拠雑録湯浅甚助伝。本書曰、直宗幼而孤。信長公使中島主水正以女妻之。視之如子「勝頼将に潰走せんとす。宜しく急ぎ之を勦（ほろぼ）すべし」と。直宗進み戦ひ敵を斬る。雑録甚助伝 保侶士をして諸軍に命ぜしめ 保侶、俗用母衣。或縄（ほろ）字。今拠三代実録清和紀 鼓譟（こそう）し軍勢を佐（たす）く。数万の軍士大喊し声山谷に震ふ。我軍亦競進し争撃す。松栄紀事曰、長阪釣閑策（むちうつ）馬先遁。跡部勝資亦走。馬場氏勝励声大詬（こう＝ののしる）曰、長坂・跡部汝勧戦者也。胡為（どうして）逃去。我諫止戦者也。今死于此。釣閑・勝資為不聞逸去。按ずるに、勝資、山縣昌景に継ぎ竹廣に向ひて戦ひ敗る。氏勝大宮前に向ひ、釣間勝頼の麾下に在り。若し先に遁るれば則ち何ぞ氏勝の陣前を過ぐるを得んや。若し氏勝兵を引き退く時に当たりて逸れ去らば則ち又先に遁るる者に非らず。蓋し、好事

者、釣間・勝資の人と為（なり）を悪みて此説を付会す。皆事実に非らず。故に取らず　馬場氏勝勝頼に告げしめて曰はく「事為すべからず。請ふ、軍を収め速かに去らん」と。我軍急ぎ勝頼の麾下に逼る。親兵三百血戦し殆ど尽く。勝頼敗走すること二十余町。氏勝の残兵八十余騎且は戦ひ且は却く。勝頼の旌旗見えざるに及び猿橋より急ぎ退く。氏勝丘壟（りょう）に登り大呼して曰はく「我は馬場美濃守なり。蓋（なん）ぞ我を殺し以て名を成さざる」と。終に刃を抽（ぬ）かずして首を授く。年六十二。塙九郎左衛門の兵河井三十郎之を獲る。内藤昌豊亦勝頼退去し既に遠のくを見還戦して死す。北條氏政の兵朝比奈※勝　※勝初事今川氏後事北條氏　適（たまたま）軍中に使し戦に與（あず）かり其の首を獲る。是日の合戦卯より未に至る。甲軍大敗し勝頼瞋目（しんもく）（激しい怒りの目をする）切歯し為す所を知らず。怫鬱（ふっうつ）（不愉快でむかむかする）として去る。唯だ初鹿傳右衛門　勝頼滅後仕麾下為使番　・土屋昌恒二人のみ騎従す。勝頼の馬頓し進むを得ず。笠井肥後己の馬を授けて疲れ馬に乗り還り闘ひて死す。人皆其の忠を称む。徳川記・甲陽軍鑑・年譜附尾並び曰はく「勝頼

敗走し傳衛門總藏に謂ひて曰はく『典厩被る所の紺地金泥保侶、先考（亡父）我に賜ふ。遺命して之を典厩に授く。銘は四郎勝頼なり。今之を棄てなば敵の獲る所と為る。吾耻なり』と。傳衛門馳せ還り信豊に告ぐ。対へて曰はく『我兵青木尾張をして之を齎（もた）らしむ。串を棄て保侶を首に纏ふ。今汝に授く』と。傳右衛門之を取り勝頼に進む。勝頼腰間に抑へて去る。傳右衛門往来の間、追兵頻りに至る。勝頼馬を駐め之を待つ。人其の勇を称ふ。時に夏月暑さ劇し。勝頼兜鍪を脱ぎ傳衛門之を持つ。所謂諏訪法性の冑、武田家の重器なり。傳右衛門疲れ頓（ずしんと腰をおろす）し、其の重みに勝へず。勝頼に稟（もう）し之を清田畷に棄つ。小山田彌助後来し之を取りて還る。徳川記又云、笠井肥後、小山田太郎十一世の裔孫なり。附し以て攻（攻）に備ふ

敗兵走り橋辺に至る。我軍急逼（ひつ）し之を撃つ。壑（たに）に陥ち水に溺れ死する者算無し（数えきれない）。**二万の衆免れて帰る者三千を過ぎず。山縣昌景・馬場氏勝・横田備中・内藤昌豊・土屋昌次・眞田信綱・昌輝・横田十郎兵衛・甘利藤藏・原胤長・安中左近・望月甚八郎・根津神平・城伊庵・小幡又兵衛昌盛**　山城守虎盛子　**・興津十良兵衛等**　拠高力系図。高力権左衛門正長斬十良兵衛　**其の余知名の士悉く戦死す。**年譜・創業記・信長譜・織田本信長記・甲陽軍鑑・家忠日記・松栄紀

事○大草松平系図曰はく「松平康安先登し級（くび）を得之を上（たてまつ）る。少焉（しばらくして）山田平一郎亦級を上る。康安之に謂ひて曰はく『汝何ぞ平生の大言に似ずして首を献ずるの遅きや』と。平一郎佯（いつわ）り答へて曰はく『吾先づ已（すで）に首を献ず。此第二級なり』と。康安叱して曰はく『吾豈に汝に劣らんや』と言未だ畢らざるに又敵陣に馳せ入り甲首を獲り之を上る。神祖之を壮とす。既にして平一郎耳語して曰はく「吾実は一級を獲る、前言は戯るのみ」と。附し以て攷に備ふ

初め松平伊忠鳶巣山に趣き其の子家忠を呼びて曰はく「我必ず先登力戦して死す。汝性命を全うし我君に事へ家声を墜とす勿れ」と。乃ち士卒を分け家忠に附く。因りて佩（お）ぶる所の箭室鹿毛（身につけていた鹿毛の矢入れを）を抜き殼（こう）を擬し（肴を整える）酒を酌み永訣す。家忠固く請ふ、父と同じく死せんと。伊忠怒りて曰はく「父子共に死なば則ち国恩未だ酬（むく）いずして継嗣亦絶ゆ。不幸不忠孰れ大なるか」と。家忠已むを得ず涙を揮ひて去る。家忠日記・鵞峯文集・本光寺碑・松栄紀事

酒井忠次諸卒を率ゐ遅明鳶巣山を襲ふ。城将武田信實開門し出で闘ふ。我兵力戦し之を破る。伊忠北（に）ぐるを逐ふ。巌城渡を過ぎ転じ闘ひて前（すす）む。敵兵後よ

り之を囲む。伊忠奮戦し之に死す。家忠日記・本光寺碑・松栄紀事 鈴木重好馬に策(むち)うち陣を陥し級を獲りて還る。時に年十八。神祖之を壮とす。鈴木重好伝 松井忠次の兵平巖権太夫城に登り火を縦つ。敵門に入る能はず河水を隔てて陣す。長篠城兵競ひ出て挟撃す。敵又大敗す。武田信實・三枝守友・和田兵部・名和無理之助・五味與三兵衛・飯尾彌四右衛門・高阪源五郎松栄紀事曰、源五郎与小山田・室賀等遁去。今従東宮記・甲陽軍鑑 皆戦死す。小山田昌行・室賀一葉軒等勝頼の敗るるを聞き営を焼き遁れ去るは是役なり。信長・神祖両軍首を獲ること一万余級。甲州の驍将鋭兵戦死し殆んど尽く。年譜・創業記・家忠日記・徳川記・松栄紀事○家忠日記曰はく「信長、獲る所の首を瘞(うず)め塚を築き信玄塚と号す。信玄の死より是年に至り其の死を匿す。故に之を名づく」と 信忠長篠城に入り奥平信昌拒守の功を奬む。初め貞能父子浜松に帰款(きかん)し、勝頼怒り信昌の妻を磔にす。故に信長、西尾小左衛門吉次 後為隠岐守 を遣はし信昌の勇敢を褒め、神祖をして其の長女を以て之に妻(とつ)がしむ。年譜及松栄紀事正文、係天正元年九月貞能帰附之時。曰、神祖悦其帰款。以

女妻信昌。而載一説為三年五月長篠大捷時事。今従之。女生数子。信昌卒為尼号盛督院 神祖、信昌の功を賞し長篠・段嶺・吉良・田原及び遠州数邑を加へ給ふ。又大般若長光刀を賜ふ。此刀所出注于元亀元年姉川之戦下 信昌の族七人・重臣五人を召し其の功を褒奬す。信長、酒井忠次の鳶巣山の功を賞し眉尖刀を賜ふ。家忠日記・松栄紀事○家忠日記曰、経歳、神祖臨忠次第（やしき）、忠次献之神祖。按ずるに、松栄紀事一説に、八月、忠次、奥平信昌と岐阜に抵（いた）る。信長、忠次の功を賞し眉尖刀・革袴を忠次に賜ふと。蓋し此時の事にして二事に非らざるなり 神祖に謂ひて曰はく「長篠大捷し勝頼の爪牙（そうが）の士亡略尽く。此声勢に乗じ長駆して進まば則ち甲信の二州を取ること掌握中に在り。然れども兵頗る疲弊す。士馬を休息せしむるに如かず。我濃州岩村に出で以て秋山伯耆を撃たん。卿、遠参二州の兵を発し甲信を経略せよ」と。神祖許諾す。信長兵を進め岐阜に還る。松栄紀事曰、神祖請信長、欲乗勢取甲州。信長曰、兵頗疲弊云云。今従家忠日記・年附（譜）附尾 神祖岐阜に往き信長の援助を謝す。信長之を厚過（過カ）す。年譜・創業記・松栄紀事 従士を召し各物を賜ひ問ひて曰はく「長篠勇鋭の長鬣（りょう）

（あごひげ）者胡為（なんすれ）ぞ見えざる」と。大久保忠佐対へて曰はく「家兄忠世故有りて来ず」と。信長曰はく「汝の兄弟長篠の功卓爾（すぐれている）群を超ゆ」と。手づから衣服を取り之を賜ふ。乃ち神祖に謂ひて曰はく「勝頼胆（きも）を喪（うしな）ひ復びは甲州を出づる能はず。卿、宜しく駿州を攻め取るべし。若し兵力足らずは吾又兵を差し之を援けん」と。神祖悦びて浜松に帰る。松栄紀事

六月、神祖二股城を攻む。砦を毘沙門堂・鳥羽山・和田島・蜷（にな）原に築き之に逼る。守将依田下野 甲陽軍鑑、依田下野、或書蘆田下野。拠雑録。依田肥前信守筆記依田某氏。蘆田以地名称之也 兵を城外に出す。小川を隔て拒戦す。城兵朝比奈彌兵衛衆に先んじて進み我兵松平彦九郎を斬る。彦九郎の妹の夫内藤家長彌兵衛を射殺す。其の弟彌蔵兄の首を収めんと欲す。家長又之を射殺す。城兵競ひ出で家長を撃たんと欲す。我軍之を撃ち破る。城兵火を郭外に縦ち城に退き入る。創せらるる者衆に後るる有り。櫻井勝次進み城門に及ぶ。其の首を斬りて還る。背の旌旗城門に絓（かか）る。（引っかかる）勝次

覚えざるなり。僕之を告ぐ。勝次馬を馳せ之を取て還る。神祖鳥羽山に在り。親ら之を見、其の勇を賞め遠州三邑を賜ふ。

翌日、依田下野、家長の射る所の矢を石川家成の営に送り其の射芸を美(ほ)む。神祖家長を褒め胴服を賜ふ。松栄紀事正文。以此事係九月十五日小山之戦。載一説為此時事。家忠日記・徳川記・年譜附尾、与一説合。今従之既にして俳優を召し申楽を作(な)し以て将士を娯しましむ。二股城固守し下らず。大久保忠世をして蜷原砦を守らしめ以て之に逼る。神祖懸川に至り高明城を攻む。武田勝頼、朝比奈又太郎及び天野景貫の兵をして之を守らしむ。路甚だ険隘(けんあい)なり。本多忠勝・榊原康政二三門に進攻し之を破る。神祖軍を横川に移す。鏡山に登り敵後に繞(ま)き出で城中に攻め入る。又太郎拒ぐ能はず。降を乞ひ甲州に奔る。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事

七月十一日福釜城主松平右京亮親次卒し、子左馬助親俊嗣ぐ。福釜松平系図。親次、右京亮親盛子。初称三郎二郎。系図曰、五月長篠之戦親次病不能軍。故遣部兵従役神祖諏訪原城を攻む。守

将室賀・小泉堅く之を拒ぐ。家忠日記・松栄紀事、無二人名。蓋室賀一葉軒・小泉源二郎也　鳥居元忠其の地形を諳(そらん)ず。衆に先んじ進み闘ふ。城兵鳥銃を放ち元忠の股に中る。従兵杉浦藤八郎之を掖(たす)けて退く。元忠の創癒え跛と為る。我軍土山を起こし柵楼を構ふ。銃矢を放ち之を囲むこと三旬。室賀・小泉力屈し守る能はず。

八月二十四日夜、潜かに城を出で小山城（吉田町）に逃げ入る。酒井正親衆に挺(ぬきん)で戦功有り。神祖之を賞め白旗を賜ふ。正親子孫に伝へ以て栄と為す。神祖、諸将に謂ひて曰はく「諏訪原は甲軍高天神に来往する所の要路なり。且は田中城（藤枝市）と僅かに大井河を隔つるのみ。必ずや敵田中より来侵すと意(おも)ふ。勝頼亦隙を伺ひ来攻せん。誰か能く我の為に此城を守る者あらん」と。衆未だ対へず。松井忠次進み之を守るを請ふ。神祖其の忠勇を奨め諱字を賜ひ名を康親と更へ周防守と称し樽木（垂木＝掛川市）・河尻（吉田町、大井川河口右岸）二邑を加へ給ふ。諏訪原城を改め牧野城と曰ふ。家忠日記・松栄紀事並注云、言勝頼暴虐如殷紂王取。周武王克之牧野之義也　牧野康成をし

て康親と與(とも)に之を戍(まも)らしむ。其の後親将一人を加へ番を遞(かわ)り之を戍る。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事○家忠日記曰、自是年至十年三月康親在牧野城凡八年

是月、神祖酒井忠次・奥平信昌を以て使として岐阜に抵(いた)らしむ。織田信長、信昌の驍勇を褒めて曰はく「今より宜しく九八郎と呼び武者之助と曰ふべし」と。因りて一文字刀及び暑衣を賜ふ。神祖高明・諏訪原二城を抜き勢に乗り小山城を攻めんと欲す。酒井忠次諫めて曰はく「我既に二城を得たり。自余の諸城神悸気奪し当(まさ)に相踵(しょう)し（次々と）来降すべし。今我、師を暴(あらわ)すこと日久し。衆頗る疲弊す。兵を収め以て後挙を図るに如かず。勝頼梟雄にして信玄を過ぐ。小山城を攻むれば則ち必ずや来救せん。此全勝の道に非らず」と。松平康親曰はく「長篠の敗甲州の精鋭殆ど殲す。勝頼救ひに出づる能はず。小山城既に陥つれば、則ち高天神の城兵攻むるを待たずして潰散すべし」と。神祖之を然りとす。忠次苦諫(くかん)する能はず。遂に小山城を攻む。駿州の旧将三浦・朝比奈・小原等拒戦す。松栄紀事曰、駿州

旧将五人守城。徳川記・年譜附尾書此三人而名闕　石川数正・松平康親前鋒を為し、松平康安先登し奮闘す。本多忠勝衆兵を指揮す。松平主殿助家忠力戦し級を獲る。武田勝頼、我軍の遠江諸城を攻むるを聞き兵を出し之を救はんと欲す。戦死する長篠将士の親族を捜訪し僧俗を択ばず其の姓氏を冒はしめ（戦死者の姓氏を残させる）以て衆心を綏撫し（安心させ）兵二万を得。

九月十五日、駿河を出て大井河上に屯す。神祖之を聞きて曰はく「前に堅城有り、後に勍敵（強敵）有り。其の来鋭を避け釁（＝隙）を俟ちて動く、軍の善謀なり」と。乃ち退軍の道路を議る。内藤信成曰はく「山を過ぎて経去せん」と。富永孫太夫曰はく「山を循りて退かば則ち敵を畏るるに似る。河に沿ひ敵に向ひて去るに如かず」と。神祖之に従ふ。石川数正・松平清宗等先鋒を為す。世子之に継ぐ。榊原康政・本多忠勝等焉に従ふ。中軍は則ち神祖の麾下なり。水野忠重・鳥居元忠等焉に従ふ。本多重次・松平甚太郎家忠等後を為し拒ぐ。小山城兵出て我軍を躡ふ。

酒井忠次・戸田一西・大津土左衛門屡(しばしば)還り闘ふ。徳川記曰、忠次・一西・土左衛門為殿。今従松栄紀事 服部二郎右衛門敵と接戦し幾(ほとん)ど危ふし。家忠馳せ之を救ふ。下馬し敵を斬り級を獲る。二郎右衛門を扶けて還る。人其の勇壮を称ふ。松栄紀事載一説曰、家忠有駿馬。名吉川。織田信長求之。家忠即献之。蹕（ける）齧（かむ）不可近。信長還之家忠。至是能認其主、自馳来屈膝使家忠乗之而還

十七日、甲軍挑戦す。水を隔て銃矢を飛ばす。高力正長・日下部五郎八還り闘ひ首級を獲る。勝頼の先鋒水を渡りて陣す。我軍伊良崎岡に至り河に沿ひて左せんと欲す。勝頼の軍其の後に在り。世子神祖に啓(もう)して曰はく「小山より此に至り敵を前にして去る。故に児（私）前軍に在り。今軍を左して北向せば則ち敵我後に在り。願はくは児殿を為さん」と。神祖曰はく「汝は尚ほ年少なり。先に去るべきなり」と。世子固く請ひ神祖之を許す。勝頼我軍の岡を下るを待ち決戦せんと欲す。神祖軍を整へ前に在り。世子隊を厳め後に在り。甲州新募の兵、其を憚り厳

整なり。出て躡ふ能はず。勝頼衆を励まし進み闘はんと欲す。高阪虎綱之を諌止す。神祖牧野城に入り、進みて馬伏塚に陣す。

十八日、勝頼小山城に入り兵を引き甲州に還る。神祖浜松に凱旋す。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事 是に先んじ二股の守将依田下野病死し其の子右衛門信蕃、衆を馭し固守す。大久保忠世蜷原砦に在り。喪に乗じ之を伐たんと請ふ。神祖忠世及び榊原康政をして之を攻めしむ。松栄紀事一説、諸士伝略並曰、是役、尾州之兵来援。松平二郎右衛門重吉年七十八。猛厲（たけだけしい）有戦功。人称其勇。重吉謂松平石見守康安曰、吾齢既垂（なんなんとす）八旬。豈欲与壮者争功哉。尾州援兵欲先衆而進。不可使他邦之兵為先登。故刀戦先衆。按ずるに、二股城は勍敵に非ず。諸書援を信長に乞ふ事無し。附し以て攷に備ふ

是月、織田信忠の将兵、濃州巖村城を攻む。守将秋山晴近・座光寺勘右衛門固守し之を拒ぐ。諸書無座光寺称。今拠徳川歴代 武田勝頼伊奈に出屯し之を救はんと欲す。甲軍の長篠に敗るるより畏縮し敢へて進まず。巖村城糧尽き力屈し降を乞ふ。信忠、

晴近及び勘右衛門を擒へ岐阜に送る。信長晴近を磔にす。以て勝頼、奥平信昌の妻を磔にするの怨みに報す。巖村城主遠山内匠助の妻、信長の従母なり。元亀三年十二月諸書無年月。今拠年譜附尾内匠助死して子無し。寡婦信長の季子（末子）坊麻呂を養ひ子と為し其の家を嗣ぐ。晴近寡婦に逼りて妻と為す。坊麻呂を甲州に遣はし質と為す。坊麻呂長而称源三郎勝長。為尾州犬山城主。家忠日記・徳川記・甲陽軍鑑・年譜附尾・松栄紀事、巖村作遠山城主巖村某。唯織田本信長記、作巖村城而無城主名。按ずるに、徳川歴代、織田信秀の妹小林殿と称す。初め巖村城主遠山内匠助に適（とつ）ぐ。元亀三年内匠助死し秋山晴近に再醮（さいしょう）す。今此に拠り之を訂す信長之を怒り手づから従母を刃にす。家忠日記・甲陽軍鑑・松栄紀事・年譜附尾

十一月、信長京師に入り権大納言兼右近衛大将と為る信忠秋田城介と為る。織田本信長記・信長譜・家忠日記・松栄紀事二股城囲まるること日久し。依田信蕃急を甲州に告ぐ。勝頼救ふ能はず。信蕃に命じ城を棄て甲州に帰らしむ。信蕃、弟善九郎・源八郎を以て質と為す。大久保忠世に就き避去を請ふ。神祖亦質を信蕃に賜ひ之を聴す。

十二月二十三日、忠世・信蕃二俣川の上（ほとり）に会ひ互に其の質を還す。信蕃高天神城に入る。松栄紀事正文曰、信蕃還甲州。一説与家忠日記合。今従之　神祖二股城を忠世に賜ひ安倍忠政をして忠世に副へ之を戍らしむ。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事　初め巖村城糧食匱乏し饑困日に甚だし。刈谷城主水野信元に就き宝貨を以て糴（てき）（買米）を乞ふ。信元其の直を送る。佐久間信盛、信元と積（年脱カ）相善からず。故に之を信長に讒して曰はく「信元密かに糧を巖村城に運ぶ」と。信長大いに怒り使を刈谷に遣はし其の実を詰問す。信元驚き家臣一人を遣はし信長の使に副へ以て其の寃（冤えん）（ぬれぎぬ）を訟（うった）ふ。両使道に酗酒（くしゅ）（酒乱）すること在り。闘ひ死す。信元懼れて岡崎に来。信長益（ます）讒を信ず。神祖をして速やかに信元を殺さしむ。神祖、之を殺すに忍びず大樹寺に居（お）かしむ。信長の怒り解けず。固く之を殺さんと欲す。

二十七日、神祖、信元をして岡崎を去らしめ平巖親吉に命じ之を中路に殺す。家忠日記・年譜附尾並曰、両使闘死。信長大怒与神祖議殺信元。二十七日、神祖使久松佐渡守俊勝迎信元至岡崎。俊勝不

知其状迎至岡崎。神祖、使平巖親吉殺信元於岡崎城下相應寺。俊勝怨之。遂与神祖絶。今従年譜正文・松栄紀事

信長刈谷城を讒臣佐久間信盛に賜ふ。織田本信長記・家忠日記

是歳、神祖安部元眞と其の子信勝とをして武田勝頼築く所の伯耆塚砦を攻めしめ之を抜く。又八荒山砦を抜き入り之を戍らしむ。諸士伝略。伯耆塚砦在駿遠二州間

烈祖成績巻之三　終